

花卷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第24集

平成28年度調査
花卷市内遺跡発掘調査報告書

馬頭遺跡・花卷城跡

2018.3

岩手県 花卷市教育委員会

平成28年度調査

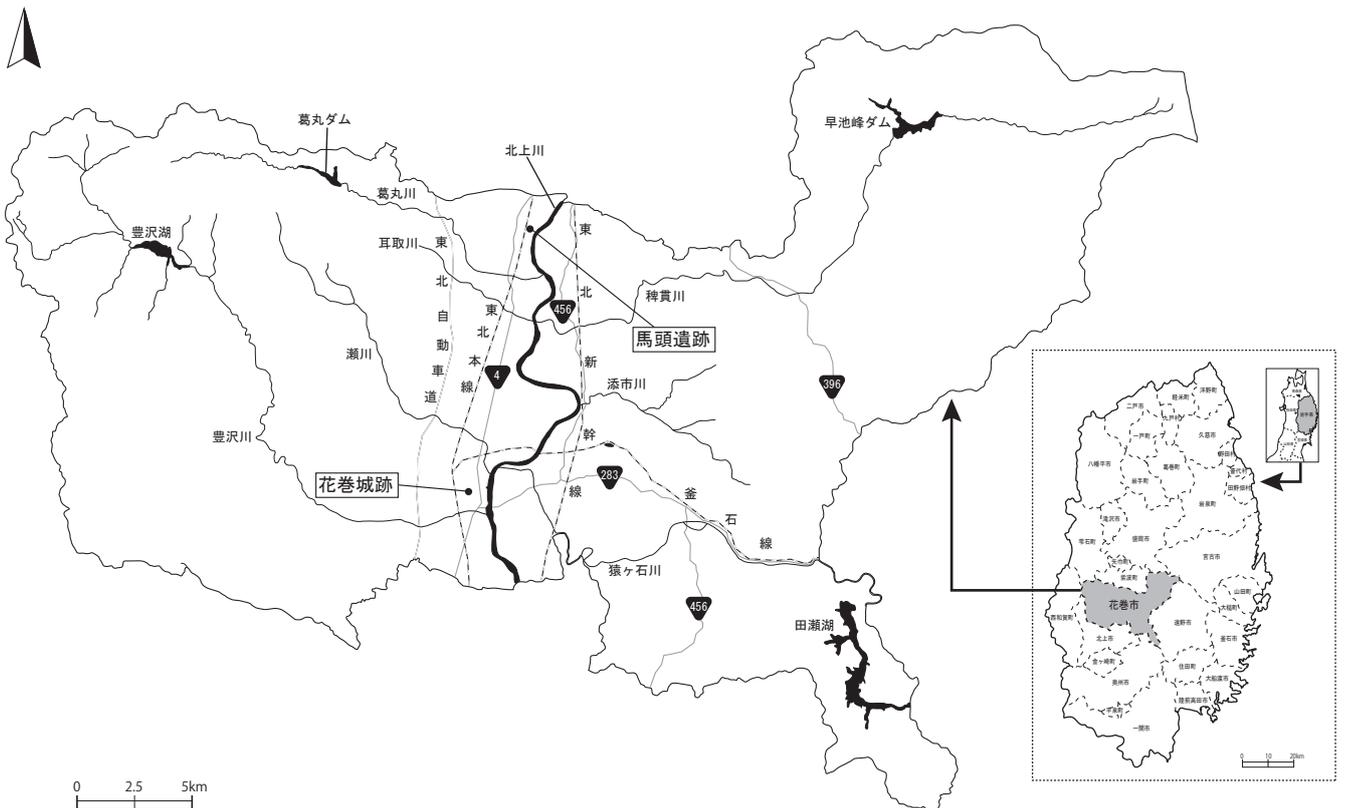
花巻市内遺跡発掘調査報告書

ばとう
馬頭遺跡・花巻城跡

例 言

1. 本書は、個人住宅建設に先がけて花巻市教育委員会が実施した緊急発掘調査の調査報告書である。本書には、馬頭遺跡及び花巻城跡（個人住宅調査1箇所及び大規模開発に係る試掘調査2箇所）における平成28年度の発掘調査成果を収録した。
2. 発掘調査は、平成28年度の国庫並びに県費補助金の交付を受けて行った。
3. 発掘調査の調査期間及び調査面積は、次の通りである。

馬頭遺跡	調査期間：平成28年（2016）5月24日～6月14日 調査面積：273㎡
花巻城跡 （個人住宅分・三之丸）	調査期間：平成28年（2016）5月9日～5月18日 調査面積：8㎡
花巻城跡 （大規模開発分①・下堀）	調査期間：平成28年（2016）5月16日 調査面積：30㎡
花巻城跡 （大規模開発分②・三之丸）	調査期間：平成28年（2016）9月13日～16日 調査面積：330㎡
4. 室内整理は、橋本征也と菊池 賢（共に花巻市教育委員会教育部文化財課埋蔵文化財係・上席主任兼学芸員）が担当した。作業期間は平成29年度である。
5. 本書の執筆は、橋本征也と菊池 賢が行った。執筆の分担は本文中に記した。また編集は菊池が行った。
6. 本書掲載の遺物写真は、高橋 純と吉田宗平（共に花巻市総合文化財センター・学芸調査員）が撮影した。
7. 調査および整理作業は、次の方々のご協力を得た。感謝申し上げたい。
菅原武志・新渕君雄・平藤達也・堀岡まゆみ・盛川義雄・雷久保克信・藤原昌子
8. 本遺跡の出土遺物及び図面・写真等の発掘調査資料は、花巻市総合文化財センターにて保管している。



調査遺跡位置図

目 次

例言
調査遺跡位置図

馬頭遺跡 発掘調査報告

I	調査に至る経過	1			
II	遺跡の位置と環境	1	<表>		
III	調査概要	2	表1	柱穴計測表	8
IV	検出された遺構と出土遺物	4	表2	出土遺物観察表	9
	(1) 竪穴状遺構	4			
	(2) 土坑	4			
	(3) 小ピット	5			
	(4) 出土遺物	5			
V	まとめ	5			
	<挿図>		<写真図版>		
	第1図 馬頭遺跡 調査区位置図	1	写真図版1	馬頭遺跡 調査前状況ほか	10
	第2図 馬頭遺跡 遺構配置図及び基本土層断面図	3	写真図版2	馬頭遺跡 検出遺構(1)	11
	第3図 馬頭遺跡 検出遺構(1)	6	写真図版3	馬頭遺跡 検出遺構(2)	12
	第4図 馬頭遺跡 検出遺構(2)	7	写真図版4	馬頭遺跡 調査区全景	13
	第5図 馬頭遺跡 検出遺構(3)	8	写真図版5	馬頭遺跡 出土遺物	14
	第6図 馬頭遺跡 出土遺物	9			

花巻城跡三之丸 発掘調査報告

I	調査に至る経過	15			
II	遺跡の位置と環境	15	<表>		
III	調査概要	17	表3	柱穴等計測表	20
IV	検出された遺構と出土遺物	19	表4	出土遺物観察表	22
	(1) A区の遺構	19			
	(2) B区の遺構	19			
	(3) 遺構外の出土遺物	20			
V	まとめ	20			
	<挿図>		<写真図版>		
	第7図 花巻城跡三之丸 調査区位置図	16	写真図版6	花巻城跡三之丸 A区	23
	第8図 『花巻城図』	16	写真図版7	花巻城跡三之丸 B区ほか	24
	第9図 花巻城跡三之丸 旧戸田本蔵屋敷遺構配置図	18	写真図版8	花巻城跡三之丸 出土遺物	25
	第10図 花巻城跡三之丸 A区	21			
	第11図 花巻城跡三之丸 B区及び出土遺物	22			

花巻城跡下堀 試掘調査報告

I	調査に至る経過	26			
II	調査概要	27	<表>		
III	検出された遺構と出土遺物	27	表5	出土遺物観察表	29
	(1) 各トレンチの様相	27			
	(2) 出土遺物	28			
IV	まとめ	28			
	<挿図>		<写真図版>		
	第12図 花巻城跡下堀 調査区位置図	26	写真図版9	花巻城跡下堀(1)	30
	第13図 花巻城跡下堀 試掘調査成果	29	写真図版10	花巻城跡下堀(2)	31

花巻城跡三之丸(新興製作所跡地) 試掘調査報告

I	調査に至る経過	32			
II	調査概要	33	<表>		
III	検出された遺構と出土遺物	33	表6	出土遺物観察表	42
	(1) 北西部の調査	33			
	(2) 中央部の調査	35			
	(3) 南東部の調査	36			
	(4) 突端部の調査	37			
IV	まとめ	38			
	(1) 北西部	38			
	(2) 中央部	38			
	(3) 南東部	39			
	(4) 突端部	39			
	(5) 総括	39			
	<挿図>		<写真図版>		
	第14図 花巻城跡三之丸(新興製作所跡地) 調査区位置図	32	写真図版11	花巻城跡三之丸(新興製作所跡地) 試掘状況(1)	46
	第15図 トレンチ詳細図(1)	40	写真図版12	花巻城跡三之丸(新興製作所跡地) 試掘状況(2)	47
	第16図 トレンチ詳細図(2)	41	写真図版13	花巻城跡三之丸(新興製作所跡地) 試掘状況(3)	48
	第17図 トレンチ詳細図(3)及び出土遺物	42	写真図版14	花巻城跡三之丸(新興製作所跡地) 試掘状況(4)	49
	第18図 『花巻城之図』	43			
	第19図 『花巻城之図』三之丸館小路・部分拡大写真	43			
	第20図 『花巻城之図』に見る武家屋敷範囲と試掘トレンチ位置の関係	44			
	第21図 『花巻城下図』部分拡大	44			
	第22図 『花巻城之図』にみえる突端部の状況	45			
	第23図 主要トレンチ配置図	45			

報告書抄録 50

馬頭遺跡 発掘調査報告

I. 調査に至る経過

平成 28 年 1 月 19 日に個人住宅建設に関連する発掘届が提出された。当該地は、過去（平成 25 年度）に一度届出が提出されており、試掘調査の結果、陥し穴状遺構・土坑・柱穴状ピットが数基見つかったのを受けて保存協議の末に届出者側が開発行為を取り下げた経緯がある。教育委員会では、埋蔵文化財が当該地に所在することから、届出者側（代理人の設計施工業者）と埋蔵文化財保護に係る協議を行った結果、建物本体部分について盛土による遺構面の保護は難しく、基礎掘削の底面が遺構検出面以下に及び埋蔵文化財の保存が困難であることが判明したために、翌年度に記録保存調査を行うことに決定した。

発掘調査は平成 28 年 5 月 24 日～6 月 14 日まで実施し、調査面積は 273m²である。

II. 遺跡の位置と環境

馬頭遺跡は、北上川右岸の中位段丘（二枚橋段丘）東端部に立地し、北方を東～南流する石沢川、また南方を東流する薬師堂川さらに埋没谷・沢状地形によりそれぞれ区切られており、遺跡南側に隣接する備中館遺跡（中世）との関係が伺われる占地となっている。縄文・古代・近世にかけての遺構・遺物が検出されている遺跡であり、標高は 93m 程である。

本遺跡の周辺には、西方に縄文・古代遺物の散布地として知られる石沢遺跡、南方に中世城館跡の備中館遺跡及び近世奥州道中の好地一里塚跡、さらに東方の段丘崖下方、低位段丘（花巻段丘）にある熊野堂遺跡は、縄文遺物の散布地及び「得」字墨書土器を出土した古代の集落跡（※）として知られている。

（※）『熊野神社遺跡発掘調査報告書（平成 18 年度）』（石鳥谷町熊野神社総代会 刊）



第 1 図 馬頭遺跡 調査区位置図

Ⅲ. 調査概要

(1) 調査体制

調査担当者：橋本 征也（主担当）・菊池 賢・高橋 純・吉田 宗平

調査作業員：菅原 武志・新淵 君雄・平藤 達也・堀岡 まゆみ・盛川 義雄・雷久保 克信

(2) グリッド配置等（第2図）

調査区内における表土の除去は、重機にて行っている。

調査に伴うグリッドは、便宜上、公共座標によらない任意の設定とした。はじめに調査区内部に任意の杭を打設し、これを基点にして南北方向に4 m間隔でそれぞれ杭を設置し、南北ラインの基準とした。また、それと直交する東西にも同様の杭を打設し、4 m四方のメッシュで調査区全体を被っている。調査区外の北西部に置いた1点を起点にして、各点には南北方向に北から順に1～6の算用数字を、また東西方向には西から順にA～Cのアルファベットをそれぞれ振しており、グリッド名はこの算用数字とアルファベットの組み合わせで2B・3Cの如く呼称し、各グリッドの範囲は打設杭の南東区画とした。なお、グリッドの南北軸は磁北より24°程東傾している。また、近隣にある標高成果値を利用し、レベルの移設も行っている。

(3) 基本土層（第2図）

当調査区における堆積土の状況は、調査区西辺と北辺にて図化し、下記の通り把握した。

- I 層** 上層は10YR3/1 黒褐色土 固くしまる IV層の粒子～ブロック 30～40%混入 小礫を若干含む 最近の造成土 下層は10YR7/4 におい黄橙色土で、固くしまる。
- II 層** 10YR5/4 におい黄褐色土 粘性あり しまりあり IV層の粒子 10～20%混入 炭粒を若干含む 土器片（縄文・古代）が混じる。
- III a 層** 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりややあり 調査区北西の斜面部を中心に堆積する。
- III b 層** 10YR3/2 黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり IV層の粒子が本層の下位を中心に20%混入 炭粒を含む。
- IV 層** 10YR7/3 におい黄橙色土 粘性強 非常に固くしまる 下位は10YR7/6 明黄褐色の色調となる 遺構検出面。

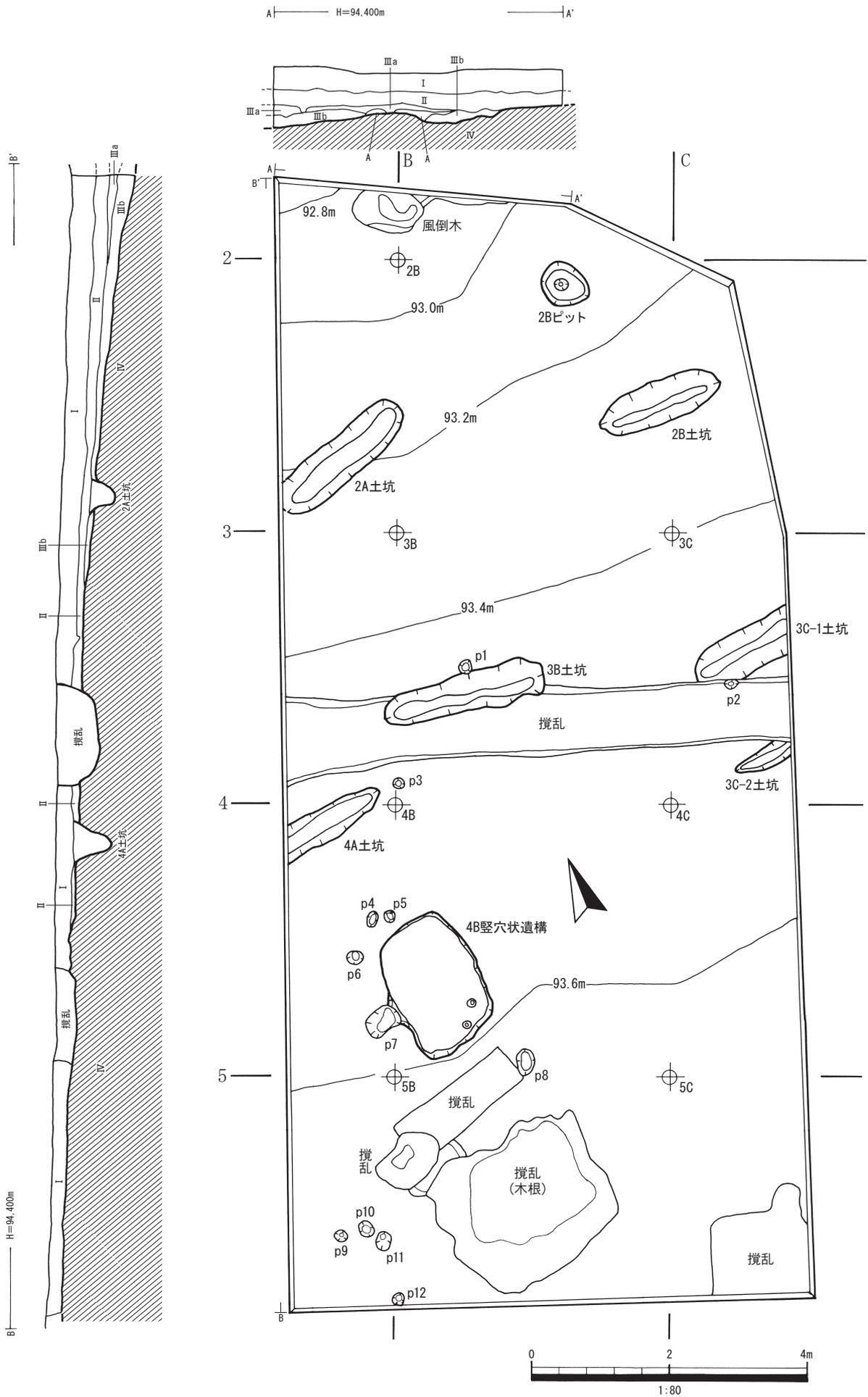
I層は表土もしくは造成土、II層もI層と層相が似るが土器片を微量に含む希薄な遺物包含層となる。III層は黒色土主体の自然堆積層であり、本層上面は2A土坑のように主な遺構の掘り込み面とみられる。

遺構の検出に関しては、調査にあたり平面的な検出に鋭意努めたが、堆積土の深さが浅く、結果として全てIV層上面にて検出したものである。

(4) 遺構精査と記録

ここでは検出遺構の精査と記録方法の概要を述べる。最初に全体をクリーニングし遺構検出を行った後、土層観察用のベルト（竪穴状遺構は十字、土坑は短軸方向）を残し埋土を除去し断面図作成を行い、完掘後には平面図の作成をし、さらに随時写真記録を併用しながら、完掘に及んでいる。平面実測は、簡易遣り方測量と平板測量を併用した。断面実測は、水平基準線から測点までの垂直距離を計測し、その測点を結線する方法で行った。

写真撮影に使用したカメラは、デジタル一眼レフカメラ・デジタルコンパクトカメラ各1台である。記録方式はJPEGとした。なお、本報告における方位マークは磁北を示すものである。



第2図 馬頭遺跡 遺構配置図及び基本土層断面図

IV. 検出された遺構と出土遺物

(1) 竪穴状遺構

4 B 竪穴状遺構（遺構：第3図・写真図版2、遺物：第6図・写真図版5）

調査区南半の4Bグリッド西南部のIV層上で検出したもので、遺構の重複はみられなかった。平面形は、東西1.3m・南北1.9mのややゆがむ隅丸長方形で、西壁中央に長さ0.55m・幅0.37m程のピット状の張り出し部（p7）をもつ。床面は平坦であり、貼床（層厚4～10cm）が施される。床面の東南部には、径10～15cm程・深さ20～30cm程の小ピットが2基見つかった。掘方壁面の残存高は10～13cm程、張り出し部（p7）の深さは6～8cmと浅いものである。埋土は、炭粒を若干含みしまり粘性ともある褐色土主体のA層のみで、貼床層（B層）は固くしまり粘性の強いにぶい黄橙色土、また張り出し部（p7）は炭粒を若干混入する黒色土となる。

遺物は、わずかに2の土師器甕の破片及び図示していないが縄文土器小片が出土したのみである。時期は、出土遺物が少ないために詳細は不明であるが、古代以降の遺構であろう。

(2) 土坑

調査区中央～北半にかけて、溝状を呈する土坑が7基検出された。

2 A 土坑（遺構：第3図、写真図版2）

調査区北半の2Aグリッド東南部のIV層上で検出したもので、遺構の重複はみられない。平面形は西端に一部が調査区外となるが、概ね東西2.3m・南北0.65mの溝状を呈し、深さは0.36～0.4mで、壁面は急角度で立ち上がり、断面形は船底型となるものである。遺構の軸方向は、75°東傾する。埋土は、炭粒を若干含む黒色土主体のA層で、上下2層に細分される。いずれも基本層序におけるⅢ層起源の層であり、自然堆積層とみられる。遺物は、一切出土していない。時期は、出土遺物が皆無であるため不明である。

2 B 土坑（遺構：第3図、写真図版2）

調査区北半の2Bグリッド東側～2Cグリッド西側のIV層上で検出したもので、遺構の重複はみられない。平面形は東西1.94m・南北0.6mの溝状を呈し、深さは0.34mで、壁面は明瞭に立ち上がり、断面形は船底型となる。遺構の軸方向は、90°東傾している。埋土は、炭粒を若干含む黒色土主体のA層で、前述の2A土坑と同様の層相となる。遺物は一切出土しておらず、時期は不明である。

3 B 土坑（遺構：第4図、写真図版2）

調査区中央の3Bグリッド西半のIV層上で検出したもので、遺構の重複はみられないが、南半部を溝状の攪乱に切られている。平面形は東西2.4m・南北0.4～0.6mの溝状を呈し、深さは0.46mで、壁面は急角度で立ち上がり、断面形は船底型となる。遺構の軸方向は、100°東傾している。埋土は、炭粒を若干含む黒色土主体のA層で、前述の2A土坑・2B土坑と同様の層相となる。遺物は一切出土しておらず、時期は不明である。

3 C - 1 土坑（遺構：第4図、写真図版3）

調査区中央東側の調査区境付近、3Cグリッド内のIV層上で検出したもので、遺構東半は調査区外となる。遺構の重複はみられないが、西端一部を溝状の攪乱に切られている。平面形は東西1.7m以上（推定2m前後）・南北0.6～0.7mの溝状を呈し、深さは0.32～0.43mで、壁面は急角度で立ち上がり、断面形は船底型となる。

遺構の軸方向は、80°東傾する。埋土は他の土坑と同じく、炭粒を若干含むⅢ層起源の黒色土主体層（A層）であるが、調査区東壁ではその下位に人為堆積様の明黄褐色～黒色土（B層）が堆積している。遺物は一切出土しておらず、時期は不明である。

3C - 2土坑（遺構：第4図、写真図版3）

調査区中央東側の調査区境付近、3Cグリッド内南側のⅣ層上で検出したもので、遺構東半の多くは調査区外となる。遺構の重複はみられないが、北半を溝状の攪乱に切られている。平面形は東西1m以上・南北0.2～0.3mの溝状を呈し、深さは0.27～0.32mで、壁面は急角度で立ち上がり、断面形は船底型となる。遺構の軸方向は、85°東傾する。埋土は他の土坑と同じく、炭粒を若干含むⅢ層起源の黒色土主体層（A層）であるが、西側断面ではその下位に人為堆積様の明黄褐色土（B層）が堆積している。遺物は一切出土していないため、時期は不明である。

4A土坑（遺構：第5図、写真図版3）

調査区中央西側の調査区境付近、4Aグリッド北側付近のⅣ層上で検出したもので、遺構西半は調査区外となる。遺構の重複はみられない。平面形は東西1.7m以上（推定2m以上）・南北0.4～0.5mの溝状を呈し、深さは0.4～0.57mで、壁面は急角度で立ち上がり、断面形は船底型となる。遺構の軸方向は、83°東傾する。埋土は他の土坑と同じく、上位が炭粒を若干含むⅢ層起源の黒色土（A層）であるが、下位は明黄褐色土（B層）が堆積している。遺物は一切出土していない。時期は、出土遺物が全くないために不明である。

2Bピット（遺構：第5図、写真図版3）

調査区北端の2Bグリッド北側のⅣ層上で検出したもので、遺構の重複はみられない。平面形は0.6～0.7mのやや不整な楕円形を呈し、断面形は浅い掘り込みの中央付近に深いピットをもつ、いわゆるロクロピット様の形状となり、深さは0.6mを測る。埋土は浅い掘り込み部が人為堆積様のいぶき黄褐色土（A層）、ピット部は径6～16cm程の柱痕様の黒褐色土（B層）で下位は空洞化していた。遺物は一切出土しておらず、時期は不明である。

(3) 小ピット（遺構：第2図、柱穴計測表8頁）

調査区南西半の4A・5Aグリッド東側付近のⅣ層上で、p4～6・8～12の計8基を検出している。平面形は径15～30cm内外・深さ10cm前後のものが多く、埋土は炭粒を若干混入する黒褐色土が主体となる。遺物は一切出土していない。

(4) 出土遺物（第6図、写真図版5）

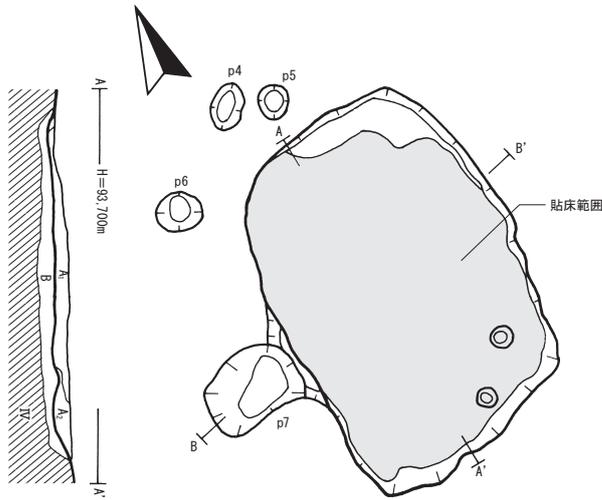
調査区内の表土や風倒木痕内部ほかから縄文時代の土器片（7～9）・石器（10・11）、古代（平安時代）の土師器・須恵器片（1～6）を少量出土している。特に、排水溝状の攪乱内より古代土器片が数点出土している。

V. まとめ

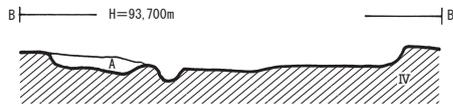
今回の調査では、北方へ緩く傾斜する斜面地形で時期不明の溝状土坑群（6基）が見つかり、これらは重複せず等高線に平行して並んでいた。いずれも掘り込みは浅く、いわゆる縄文期のTピットとは平面形は似るものの断面形状が異なるものであり、周辺部の調査成果を待って、遺構の性格も含めた今後の検討が必要となろう。

（以上、文責 橋本）

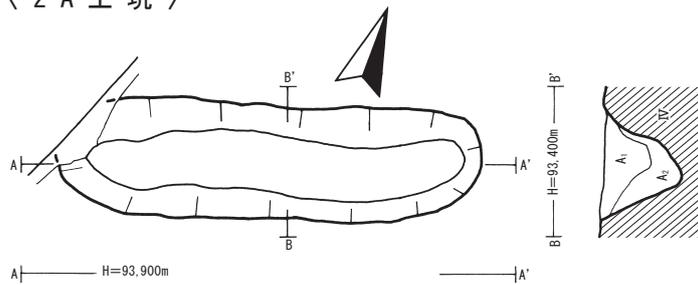
〈 4 B 竖穴状遺構 〉



- A₁層. 10YR4/4 褐色土 粘性あり しまりあり
IV層の粒子〜ブロック 30〜40%混入。
炭粒を若干含む。埋め戻しの人為堆積層とみられる。
- A₂層. 10YR3/4 暗褐色土 粘性ややあり 固くしまる
IV層の粒子と炭粒を若干含む。
- B層. (貼床) 10YR7/4 におい黄橙色土 粘性強
固くしまる IV層の粒子〜ブロック 40%混入。

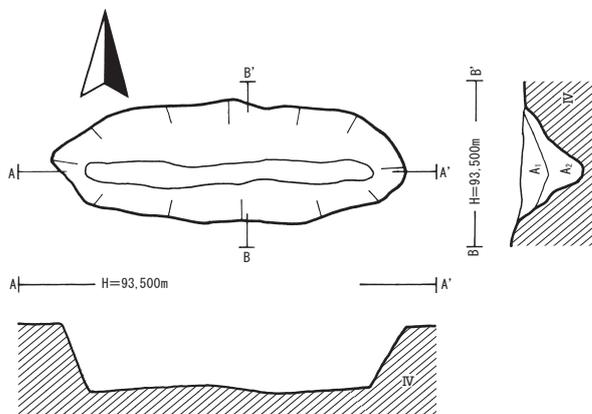


〈 2 A 土坑 〉



- A₁層. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりややあり
IV層の粒子〜ブロック 10%混入。炭粒を若干含む。
- A₂層. 10YR2/2 黒色土 粘性あり しまりあり
IV層の粒子〜ブロック 20%混入。炭粒を若干含む。

〈 2 B 土坑 〉

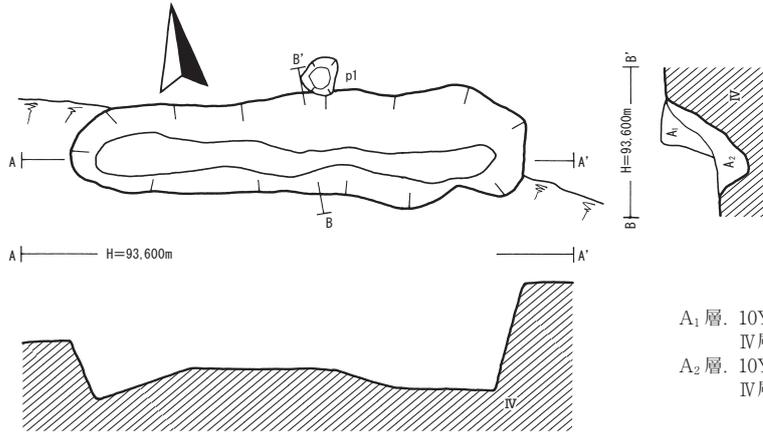


- A₁層. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりあり
IV層の粒子〜ブロック若干混入。
- A₂層. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり しまりあり
IV層の粒子〜ブロック 20%混入。炭粒を若干含む。



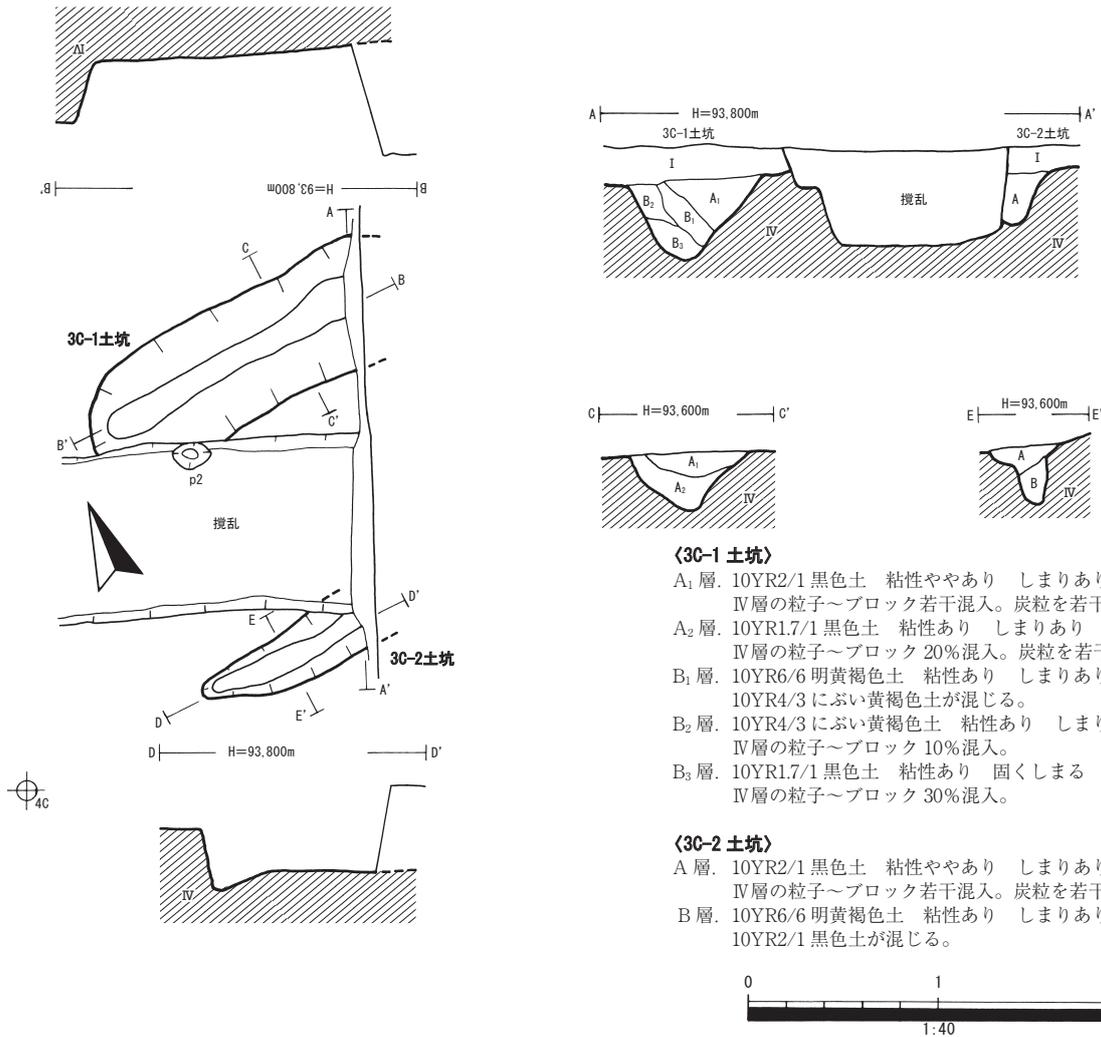
第 3 図 馬頭遺跡 検出遺構 (1)

〈3B土坑〉



A₁層. 10YR2/1 黒色土 粘性あり しまりあり
IV層の粒子～ブロック若干混入。
A₂層. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり しまりややあり
IV層の粒子～ブロックを20%混入。炭粒を若干含む。

〈3C-1土坑、3C-2土坑〉



〈3C-1土坑〉

A₁層. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりあり
IV層の粒子～ブロック若干混入。炭粒を若干混入。
A₂層. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり しまりあり
IV層の粒子～ブロック20%混入。炭粒を若干混入。
B₁層. 10YR6/6 明黄褐色土 粘性あり しまりあり
10YR4/3 にぶい黄褐色土が混じる。
B₂層. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性あり しまりあり
IV層の粒子～ブロック10%混入。
B₃層. 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり 固くしまる
IV層の粒子～ブロック30%混入。

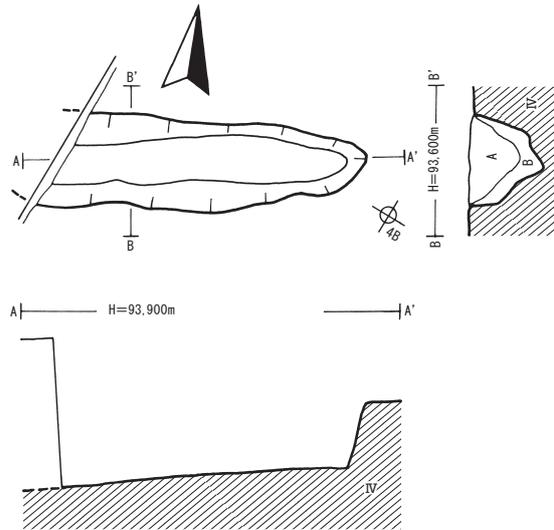
〈3C-2土坑〉

A層. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりあり
IV層の粒子～ブロック若干混入。炭粒を若干混入。
B層. 10YR6/6 明黄褐色土 粘性あり しまりあり
10YR2/1 黒色土が混じる。



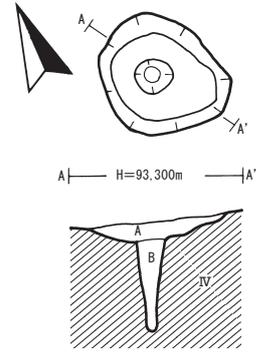
第4図 馬頭遺跡 検出遺構(2)

〈4A土坑〉

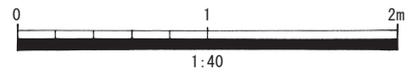


A層. 10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりややあり
IV層の粒子〜ブロック若干混入。炭粒を若干混入。
B層. 10YR6/6 明黄褐色土 粘性あり しまりあり
IV層の粒子〜ブロック 50〜60%混入。炭粒を若干混入。

〈2Bピット〉



A層. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 粘性あり しまりあり
IV層の粒子〜ブロック 20〜30%混入。炭粒を若干混入。
B層. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり しまり弱
IV層の粒子〜ブロック 10〜20%混入。



第5図 馬頭遺跡 検出遺構 (3)

表1 柱穴計測表

番号	グリッド	開口部径(cm)	深さ(cm)	底面標高値(m)
p1	3B	23×19	17.9	93.24
p2	3C	21×15	25.7	92.83
p3	3B	18×15	10.0	93.32
p4	4A	28×16	7.3	93.41
p5	4A	19×16	49.3	92.99
p6	4A	25×22	8.6	93.40
p7	4A	52×36	12.0	93.38
p8	4B	38×24	9.3	93.53
p9	5A	18×15	14.7	93.49
p10	5A	26×21	12.7	93.47
p11	5A	30×21	18.7	93.40
p12	5B	18×15	19.4	93.39

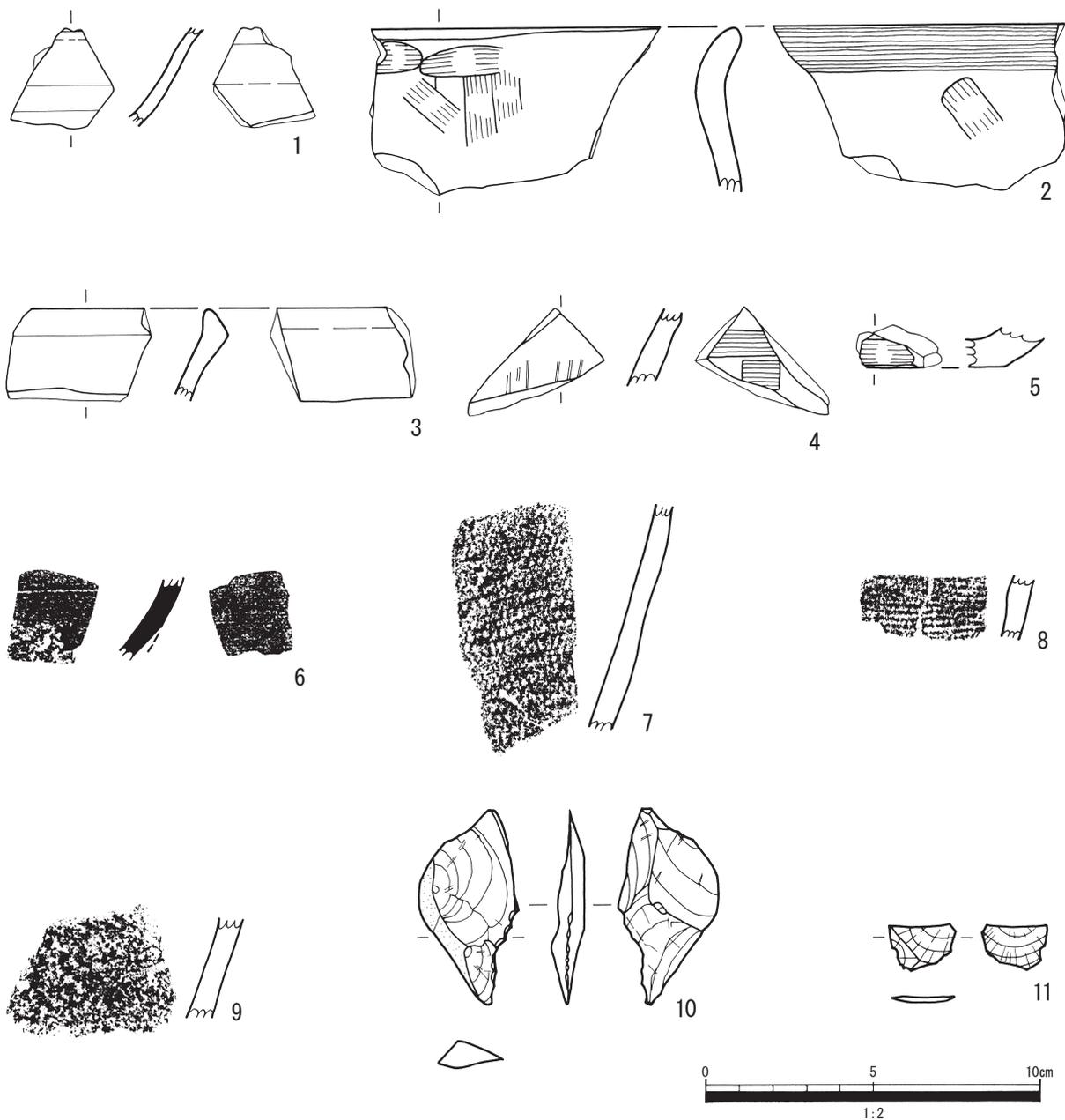


表2 出土遺物観察表

■土器

掲載番号 図 番号	登録 番号	遺構名	出土地点	出土層位	種類	器種	部位	計測値			器面調整等			備考
								口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	外面	内面	底部裏	
6	1	遺構外	3B~3C溝状攪乱	—	土師器	坏	口縁~胴部	—	—	(30)	ロクロナデ	ロクロナデ	—	赤焼き土器
6	2	4B壁穴状遺構	4B	A1層下位	土師器	甕	口縁~胴部	—	—	(50)	ヘラナデ	ヘラナデ	—	ロクロ未使用
6	3	遺構外	3B~3C溝状攪乱	—	土師器	甕	口縁	—	—	(28)	ロクロナデ	ロクロナデ	—	
6	4	遺構外	3A	—	土師器	甕	胴部	—	—	(14)	ハケメ	ヘラナデ	—	ロクロ未使用
6	5	遺構外	3B~3C溝状攪乱	—	土師器	甕	底部	—	—	(10)	ヘラナデ	不明	不明	
6	6	遺構外	5C	I層	須恵器	小型甕	胴部	—	—	(26)	ロクロナデ	ロクロナデ	—	
6	7	遺構外	風倒木	—	縄文	深鉢	胴部	—	—	(68)	LR単節縄文	—	—	
6	8	遺構外	3B~3C溝状攪乱	—	縄文	鉢	胴部	—	—	(10)	LR単節縄文	—	—	
6	9	遺構外	4B	—	縄文	深鉢	胴部	—	—	(30)	—	—	—	内外面とも磨滅

※()内は残存値

■石器

掲載番号 図 番号	登録 番号	遺構名	出土地点	出土層位	種類	計測値			重さ(g)	石材	備考
						長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)			
6	10	遺構外	5B攪乱	—	剥片石器	59	30	10	10.52	頁岩	
6	11	遺構外	5B	I層	剥片	14	20	2	0.62	頁岩	

第6図 馬頭遺跡 出土遺物



調査前状況（北から）



基本土層 断面（東から）

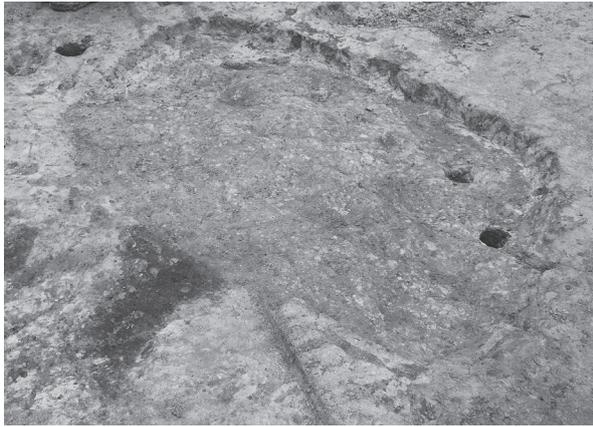


表土除去（東から）



遺構検出状況（北から）

写真図版1 馬頭遺跡 調査前状況ほか



4B 竖穴状遺構 完掘（南から）



4B 竖穴状遺構 断面（南西から）



2A 土坑 完掘（南から）



2A 土坑 断面（東から）



2B 土坑 完掘（南西から）



2B 土坑 断面（東から）



3B 土坑 完掘（北から）

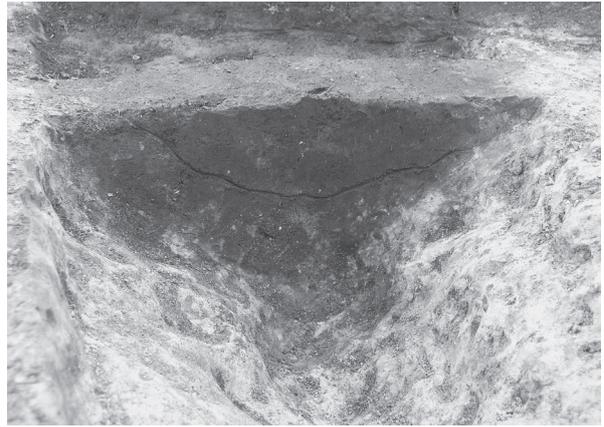


3B 土坑 断面（東から）

写真図版 2 馬頭遺跡 検出遺構 (1)



30-1 土坑 完掘（南から）



30-1 土坑 断面（南西から）



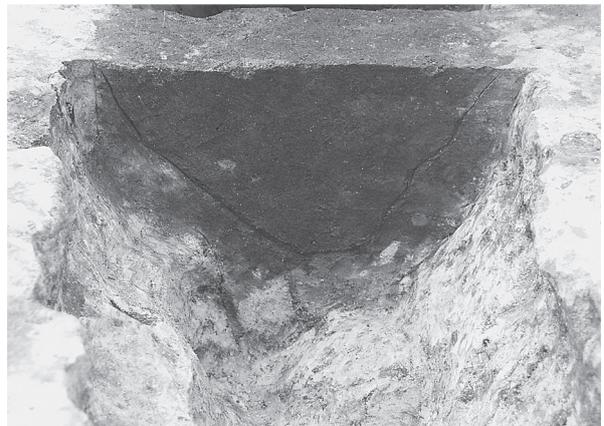
30-2 土坑 完掘（北から）



30-2 土坑 断面（西から）



4A 土坑 完掘（南東から）



4A 土坑 断面（東から）



2B ピット 完掘（南西から）



2B ピット 断面（南西から）

写真図版 3 馬頭遺跡 検出遺構 (2)



調査区 全景（南西から）



北半調査区 全景（東から）

写真図版4 馬頭遺跡 調査区全景



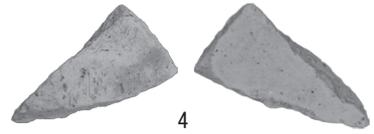
1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11

写真図版 5 馬頭遺跡 出土遺物

花巻城跡三之丸 発掘調査報告

I. 調査に至る経過

平成 27 年 10 月 28 日に個人住宅建設に関連する発掘届が提出された。教育委員会では、中世～近世にかけての多くの遺構・遺物が検出されている重要な史跡であり、埋蔵文化財が所在する可能性が極めて高いことから、同年 11 月 11 日に重機を用いて試掘調査を実施した。試掘は建築予定範囲内に東西方向のトレンチ（幅 1.5m）を 2 本設定し遺構の有無確認を行った結果、掘削予定の基礎深度より上位面において北側で複数の柱穴（柱穴群）及び南側で落込み箇所 1 ヶ所ほかを検出した。

これを受けて、届出者側（代理人の設計施工業者）と埋蔵文化財保護に係る協議を同年 11 月下旬～12 月上旬にかけて数度行った結果、建物本体部分は盛土厚を増して遺構面を保護することとなり、一方で掘削の避けられないガス管及び上下水道管の埋設予定部分について翌年度に記録保存調査を行うことにそれぞれ決定した。

発掘調査は平成 28 年 5 月 9 日～5 月 18 日まで実施し、調査面積は 8㎡とした。

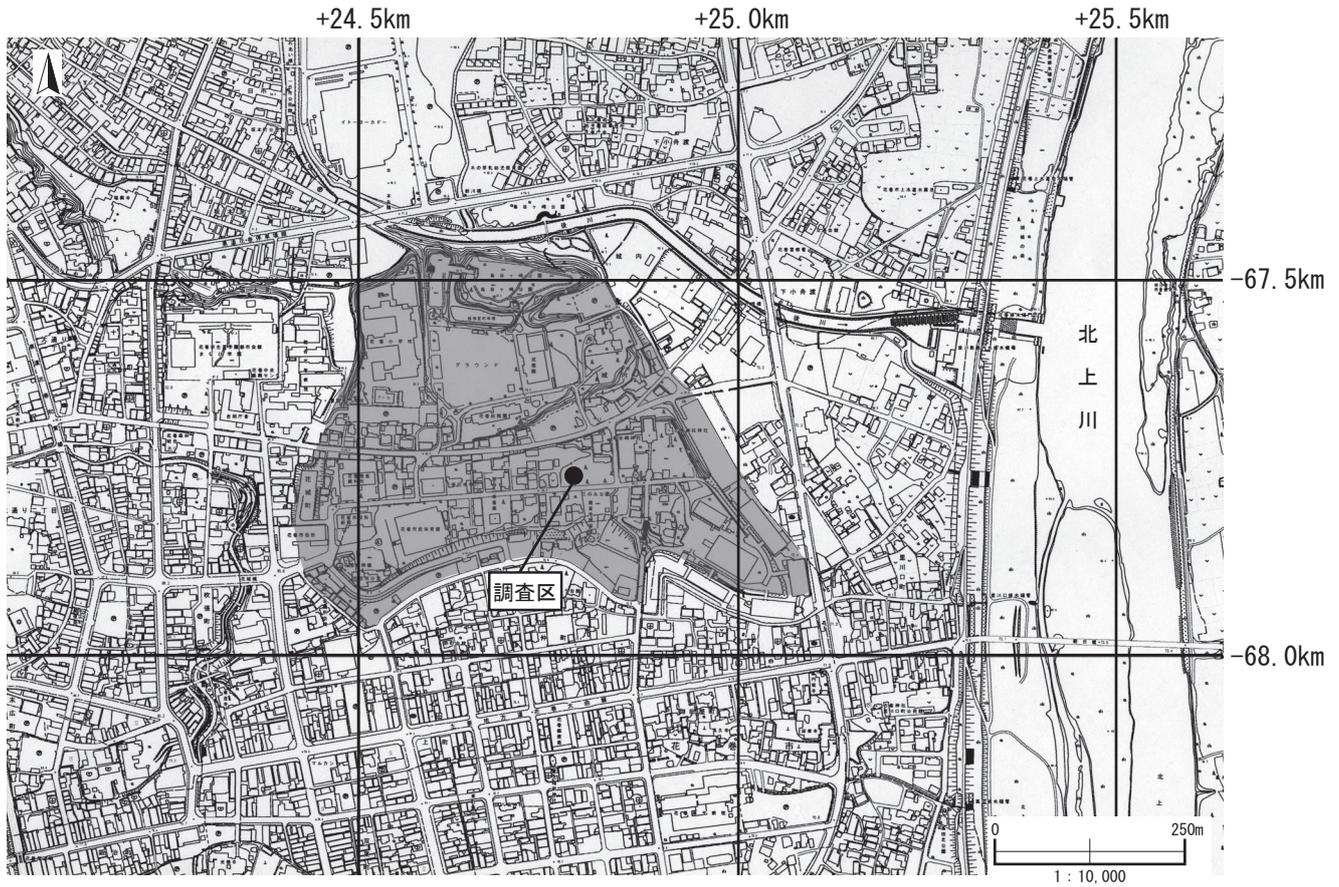
II. 遺跡の位置と環境

花巻城は北上川右岸の低位河岸段丘東端に立地する平山城である。規模は南北約 500 m・東西約 700 m、面積約 236,700㎡であり、標高は 85 m 程度である。城の北・東・南は、河川の浸食による急崖で天然の要害をなし、地続きとなる西縁部分は南北約 350 m×幅約 30 mにおよぶ「濁堀」によって段丘を断ち切り、堅固な守りを形成している。城内は本丸・二之丸・三之丸の三層構造で、最北には本丸を配す。次いで南に二之丸・三之丸が水堀や土塁で区画され構築されている。三之丸南側の崖下には水堀である「上堀」と「下堀」が廻される。また、城跡の北～東側は北上川や瀬川、さらに南側を支流・豊沢川が第 2 の外堀の役割をもち、周囲とは厳しく分けられている。

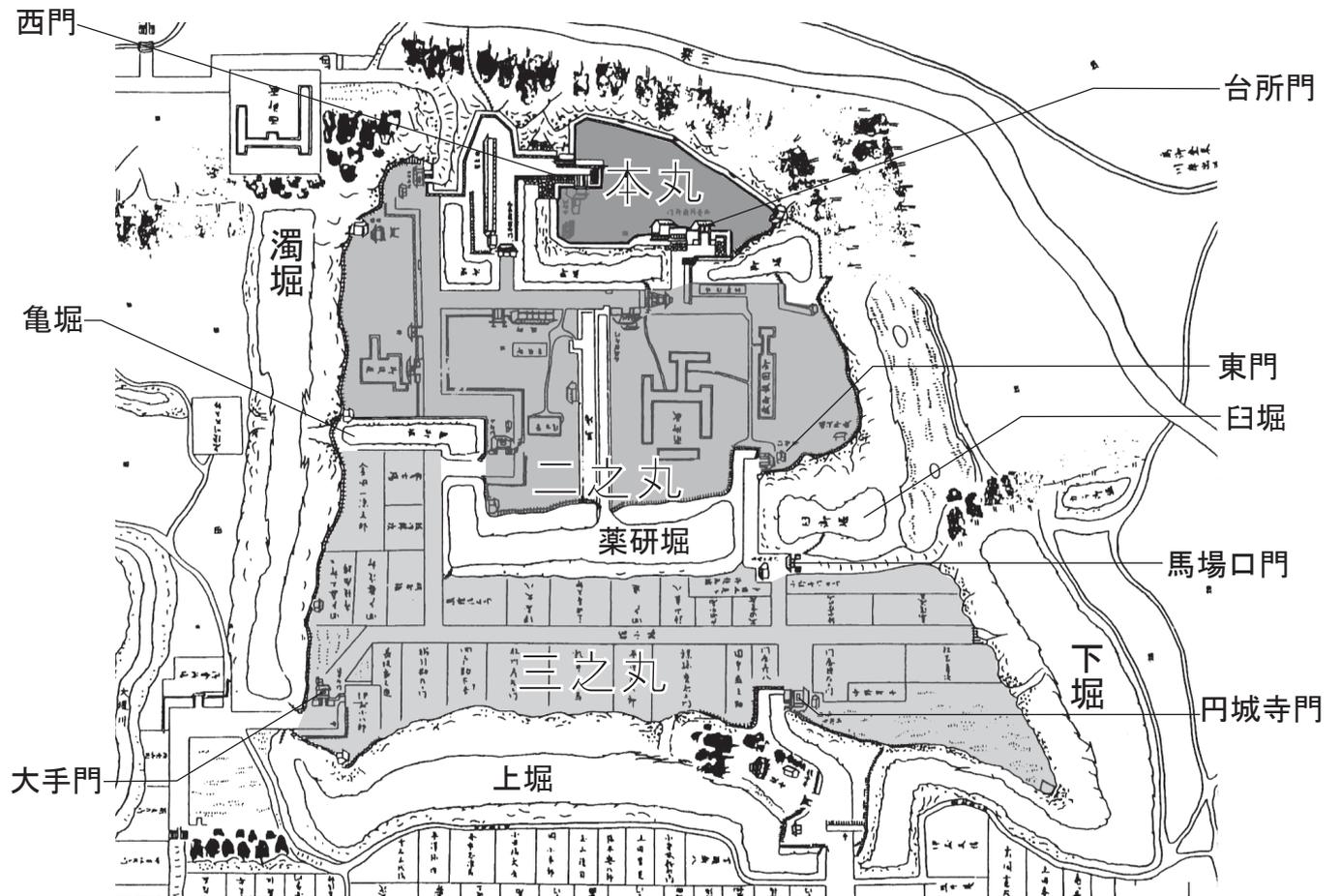
本丸には藩主御成の御殿が建てられ、二之丸には官舎や倉庫群があった。三之丸には、「館小路」と呼ばれる東西道路に面して、花巻城に詰める武士の屋敷群が連なっていた。そして、城外には北～西～南方へかけて奥州道中が縦貫し城下町が形成され、城の北西には四日町・一日市町、城の南には川口町・豊沢町・鍛冶町等が開かれ、現在の市中心部形成の礎となっている。町場の随所にはクランク状の道路屈曲や中小の河川・用水で場所の区画をするなど、惣構とも言うべき防御性ある城下町の構造になっている。

花巻城の前身は鳥谷ヶ崎城といい、稗貫郡の中世領主・稗貫氏の居城であった。稗貫氏の鳥谷ヶ崎城時代の実態は発掘調査でも明らかになっておらず、未だ謎に包まれたままである。天正 18 年（1590）、稗貫氏はいわゆる奥州仕置で領地を追われる。稗貫郡は太閤秀吉の直轄を経て、天正 19 年に南部氏の支配となる。この時、鳥谷ヶ崎城には南部氏一族の北秀愛が八千石を知行、城代として入城し、城内と街区の整備に着手した。このころ鳥谷ヶ崎城を改めて「花巻城」と呼ばれるようになったと伝えられる。慶長 3 年（1598）に北秀愛が没すると、後任にはその父親の北信愛（松斎）が着任し、城内外の整備を一層促進した。次の城主である南部政直の時期にもまた、城内の普請が推進されている。花巻城の主たる改築は、以上の南部氏支配当初に積極的に行われていることが知られている。逆にそれ以降の大規模改築を示す史料は無いので、花巻城の曲輪構造は 17 世紀前葉頃までには一定の完成をみていたものと考えられる。

17 世紀中葉には北上川流路変更工事が 3 期に亘り実施された。当時の北上川は本丸北直下を流れ、洪水の際は本丸を削り取る危険性があった。難工事の末に今日の流れを得て、花巻城は崩壊を免れた。



第7図 花巻城跡三之丸 調査区位置図



第8図 『花巻城図』(もりおか歴史文化館所蔵に加筆)

19世紀前葉の文化・文政年間には、花巻城の支配縮小を主とした官制改革が議論された。これに座して、花巻御給人の新渡戸維民（稲造の先祖）が田名部に配流処分を受ける事態も発生した。

幕末期の動乱は、花巻城も渦中に巻き込んだ。奥羽越列藩同盟（明治元年）に加わった盛岡藩は、同盟を離脱した秋田藩に対して進撃し、花巻城からも部隊を編制して参戦している。盛岡藩の降伏後は、花巻城のある稗貫地方は朝廷直轄となった。その後、花巻城内に行政拠点が置かれることもあったが、明治3年（1870）の段階で城内不要建物等の払い下げが行われている。そして、明治6年（1873）には岩手県布令により城内建物・石垣・武具等が払い下げとなり花巻城は廃城となった。

その後の花巻城跡には、岩手軽便鉄道（大正3年（1914）開通）の線路が敷設され、学校や官庁、民間住宅がひしめくようになる。昭和20年（1945）の花巻空襲の際は、大手門跡付近に爆弾が投下されたこともあった。

今日は、本丸が花巻市史跡に指定され保護されているほか、本丸正門の西御門や石垣が復元整備されている。二之丸・三之丸は公共施設や民間住宅が多い状況であるが、三之丸搦手の円城寺門が現存するほか、部分的に公園整備が行われ保護も徐々に進んでいる。

Ⅲ. 調査概要

(1) 調査体制

調査担当者：橋本 征也（主担当）・高橋 純・吉田 宗平

調査作業員：平藤 達也・雷久保 克信

(2) 調査区設定（第9図）

調査範囲内の表土層の除去については、届出者側の協力により重機にて行った。

今回は、調査範囲が限定され面積も少なかったため、グリッドの設定は行わないこととした。また、標高値等記録のため、近隣地にある標高成果値を利用してレベルの移設を行った。

なお、便宜上、北西側の調査区をA区、南東側の調査区をB区とそれぞれ呼称し区別している。

(3) 基本土層（第10図）

今次調査区における基本層序は、攪乱を受けた箇所が多いものの、概ね過去の花巻城跡の調査と同様に捉えている。A区での様相を示すと、次の通りである。

I層 10YR3/2 黒褐色土 植物根を混入 層厚 10cm内外 表土。

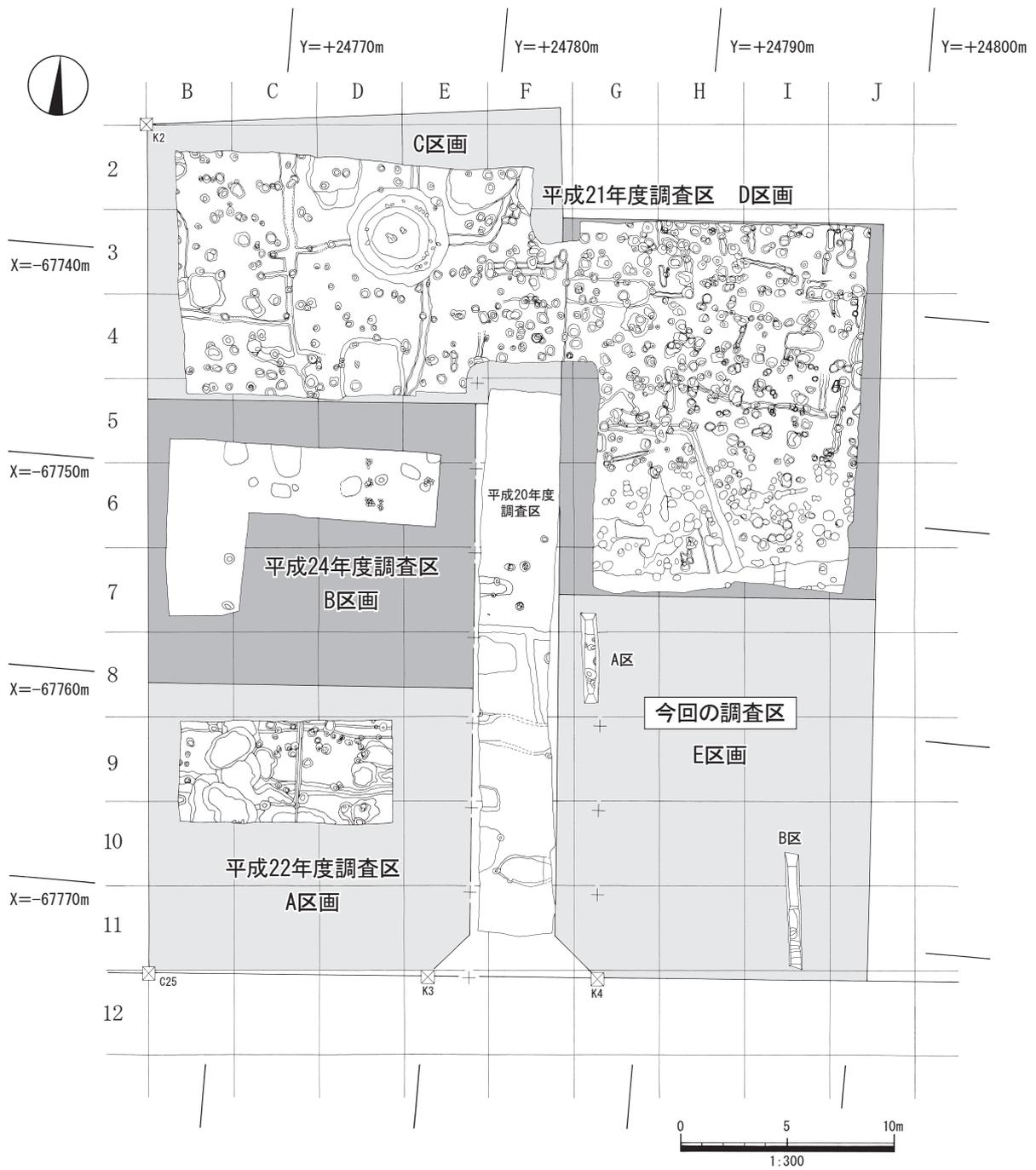
II層 10YR4/4 褐色土 しまる 小礫を混入 層厚 10～15cm 人為堆積土。

III層 10YR5/2 灰黄褐色土 粘性あり 部分的に炭化物粒を混入 酸化が顕著 層厚 10～20cm 旧表土様（整地層か）。上面は主な遺構（柱穴）の掘り込み面となる。

IV層 10YR6/6 明黄褐色土 粘性強い 一部に植物根を混入 層厚不明。

II層の礫を混入する黄褐色主体土は従来の調査成果より近世花巻城期の整地層と推定されているもので、またIII層の黒灰～灰褐色主体の粘質土は旧表土（もしくは中世鳥谷崎城期の整地層か）とみられるものである。

調査にあたっては平面的な遺構の検出に鋭意努めたが、調査区範囲の制約もありIII層上面での検出はできず、結果的に全てIV層上面にて検出している。



第9図 花巻城跡三之丸 旧戸田本蔵屋敷遺構配置図

(4) 遺構精査と記録

検出遺構の調査と記録方法の概要についてであるが、柱穴状ピットは順次、検出後に埋土を一部掘り下げて柱痕の有無を確認し、次いで二分法により埋土を半裁し堆積土の確認を行いながら、断面図作成と写真撮影など記録を行い、完掘に及んだ。

遺構実測の方法であるが、平面図は平板測量で行った。断面図は水平基準線を設定の後、水平基準線から測点までの垂直距離を計測し、その測点を結線する方法で行った。

写真撮影は、検出、埋土土層断面、完掘、遺物出土など発掘作業の各過程で行った。使用したカメラは、デジタル一眼レフカメラとデジタルコンパクトカメラ各1台である。記録方式はJ P E Gである。撮影前には、対象を記録した「撮影カード」を初めに撮影し、整理作業の混乱を避けるようにした。

なお、本報告における方位マークは磁北を示すものである。

IV. 検出された遺構と出土遺物

今次調査で検出した遺構は、柱穴状ピット7基・焼土を含むピット1基、溝跡1条である。出土遺物の総量は陶磁器10点・焼成粘土1点・種子1点の計12点で、このうち9点を実測・掲載した。

(1) A区の遺構（遺構：第10図・写真図版6・柱穴等計測表20頁、遺物：第11図・写真図版8）

〔位置・検出状況〕北西のA区内では、柱穴状ピットを7基検出している。ただし、北側は大きく攪乱を受けており詳細は不明である。

平面上はいずれもIV層上面で検出したものであるが、東壁断面の観察によるとp1・p3・p4は上位のⅢ層上面からの掘り込みが確認でき、他のものについても同様の状況であった。

遺構の重複関係は、南半でp5とp6が重複しており、前者を後者が切っている。

〔形状・規模〕径30～40cm前後の円～楕円形プランが主であるが、中にはp6のように径50～60cm前後の大型のもの、焼土ピット及びp2のように10～20cm前後の小型のものも含まれる。IV層上面からの深さは20～40cm前後を測る。p2及びp4のように内部に径10cm前後の柱痕跡がみられることから、柱列もしくは掘立柱建物跡を構成していたものと推定されるが、調査範囲の制約上から詳細は不明である。

〔埋土・堆積状況〕柱痕を残さないものは、しまり粘性ともあり炭粒・小礫を若干含むにぶい黄褐色土主体で、上下2層に分かれるものが多い。柱痕が残るものは、柱痕部（p2のA層、p4のB層）が黒褐色～灰黄褐色土、根固め部（p2のB層、p4のC層）がしまり粘性とも強いにぶい黄褐色～褐色土となる。

〔出土遺物〕遺物は総じて少ない。わずかに、p6の埋土上層（A1層）より17～18世紀代とみられる肥前産磁器の瓶（5）や壁土とみられる焼成粘土片、さらに桃とみられる種子が出土しているのみである。

〔時期〕出土遺物が限られ詳細は不明であるが、p6出土の磁器片からみて、おそらくは江戸時代の遺構であろう。

(2) B区の遺構（遺構：第11図・写真図版7・柱穴等計測表20頁、遺物：第11図・写真図版8）

〔位置・検出状況〕南東のB区内南半では、浅い落ち込み1箇所とその内部にピット1基、溝状落ち込み1箇所をそれぞれ検出している。ただし、北側及び南側は大きく攪乱を受けており詳細は不明である。

B区内におけるⅢ層は、この落ち込み内にも堆積が認められ、また落ち込み内のIV層直上に炭化物ブロックが検出されていることからみて、整地層の可能性がある。このため、落ち込み及びその内部で検出されたp7と溝状も全て整地に伴う地業痕跡とみられるが、調査範囲の制約により詳細は不明である。

〔形状・規模〕 落ち込みの範囲は南北3 m以上続くとみられるものであるが、南端を攪乱により削られるため詳細は不明である。深さは10cm前後と浅く、壁の立ち上がりも緩やかである。

〔埋土・堆積状況〕 全て整地層とみられるⅢ層（しまり粘性ともある褐灰色土で、下位の所々に炭ブロックを含む）で覆われるものである。

〔出土遺物〕 遺物は総じて少ないが、Ⅲ層より2及び4といった肥前産磁器の碗皿類（17～18世紀代）がわずかに出土している。

〔時期〕 出土遺物が限られ詳細は不明であるが、磁器片からみて江戸時代の遺構である可能性がある。

表3 柱穴等計測表

番号	調査区	開口部径(cm)	深さ(cm)	底面標高値(m)
p1	A区	36×32	28.9	84.108
p2	A区	21×15	21.2	84.185
p3	A区	31×?	34.1	84.151
p4	A区	36×?	44.1	84.039
p5	A区	30×?	29.2	84.211
p6	A区	55×44	35.8	84.142
p7	B区	50×?	5.8	84.093

(3) 遺構外の出土遺物（第11図・写真図版8・遺物観察表22頁）

少数であるが、A区を中心にⅡ～Ⅲ層より出土している。

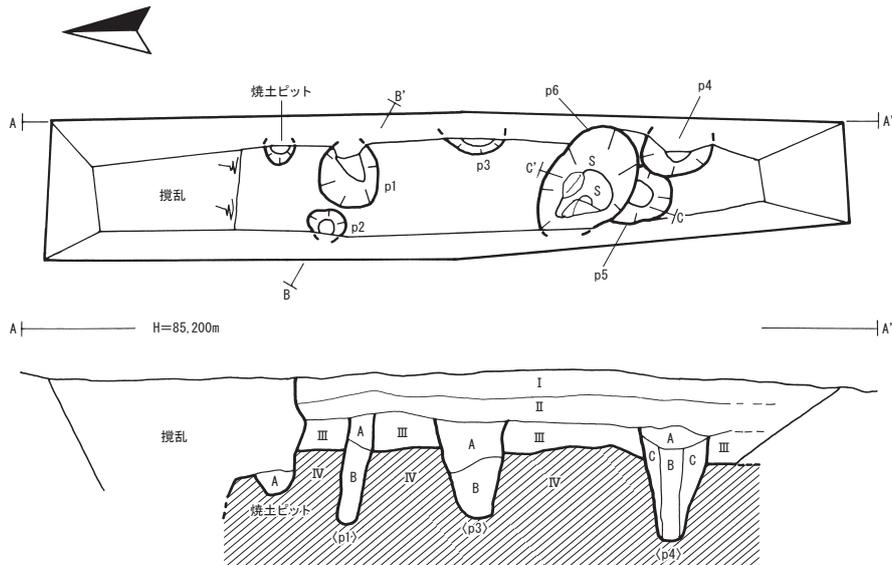
1・6～9はA区出土のもので、肥前もしくは東北産（大堀相馬ほか）の陶磁器碗・鉢類であり、3はB区出土の肥前産磁器皿であり、概ね18世紀代を主とする江戸時代のものである。

V. まとめ

今回の調査区は、平成20～22年度及び平成24年度に調査を実施した江戸後半期（19世紀代）の戸田本蔵屋敷跡（嘉永3年及び安政3年「花巻城図」に記載）の敷地内東南部（E区画と呼称、第8・9図参照）にあたる。これまでの調査により敷地北半はほぼ完掘しているが、不明であった南半の様相を知る上で、今回の調査は部分的ではあるものの以下の示唆を与えてくれた。すなわち、北側のA区では柱穴群が分布し、南側のB区では柱穴が一切検出されなかったことである。これは、敷地北半で実施した平成21年度調査において、江戸期の武家屋敷本体を含むとみられる密度の濃い柱穴群（D区画）及び大井戸跡（C区画）などを検出したこと、それとは対照的に同22年度調査及び今回の調査では柱穴配置が前述の北半に比較してやや疎となり、しかも旧館小路に面した部分では柱穴が皆無であったため、敷地内の南半部分はいわば「前庭」若しくは「付属建物」で占められていた可能性が指摘できる。出土遺物は今回は全て江戸期の遺物が出土したのみであり、中世期まで遡る遺物は一切出土しなかった。

（以上、文責 橋本）

〈A区〉



- I層. 10YR3/2 黒褐色土 植物根多い。
- II層. 10YR4/4 褐色土 しまりあり 小礫を混入。
- III層. 10YR5/2 灰黄褐色土 粘性あり 炭粒を混入。
- IV層. 10YR6/6 明黄褐色土 粘性強。

〈焼土ピット〉

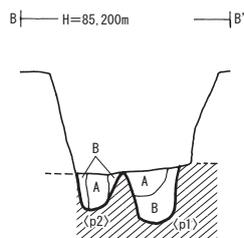
- A層. 2.5YR4/6 赤褐色 焼土 粘性あり しまりあり IV層の土が混じる。

〈p3〉

- A層. 10YR5/4 におい黄褐色土 粘性あり 固くしまる 小礫を若干混入。IV層の粒子〜ブロックを40〜50%混入。炭ブロックを若干混入。
- B層. 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性あり 固くしまる IV層の粒子〜ブロックを30%混入。

〈p4〉

- A層. 10YR4/3 褐色土 しまりあり 小礫を10%混入。
- B層. 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性あり しまりあり 小礫を若干混入。径10cm程の柱痕。
- C層. 10YR4/6 褐色土 粘性あり 固くしまる 小礫を若干混入。

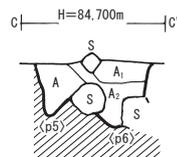


〈p1〉

- A層. 10YR5/4 におい黄褐色土 粘性あり 固くしまる IV層の粒子〜小ブロックを40%混入。小礫を若干混入。
- B層. 10YR4/3 におい黄褐色土 粘性あり しまりあり。

〈p2〉

- A層. 10YR3/1 黒褐色土 柱痕とみられ、軟らかい。
- B層. 10YR4/3 におい黄褐色土 粘性あり しまりあり IV層の粒子〜ブロックを30〜40%混入。

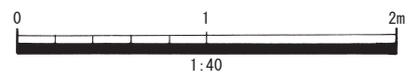


〈p5〉

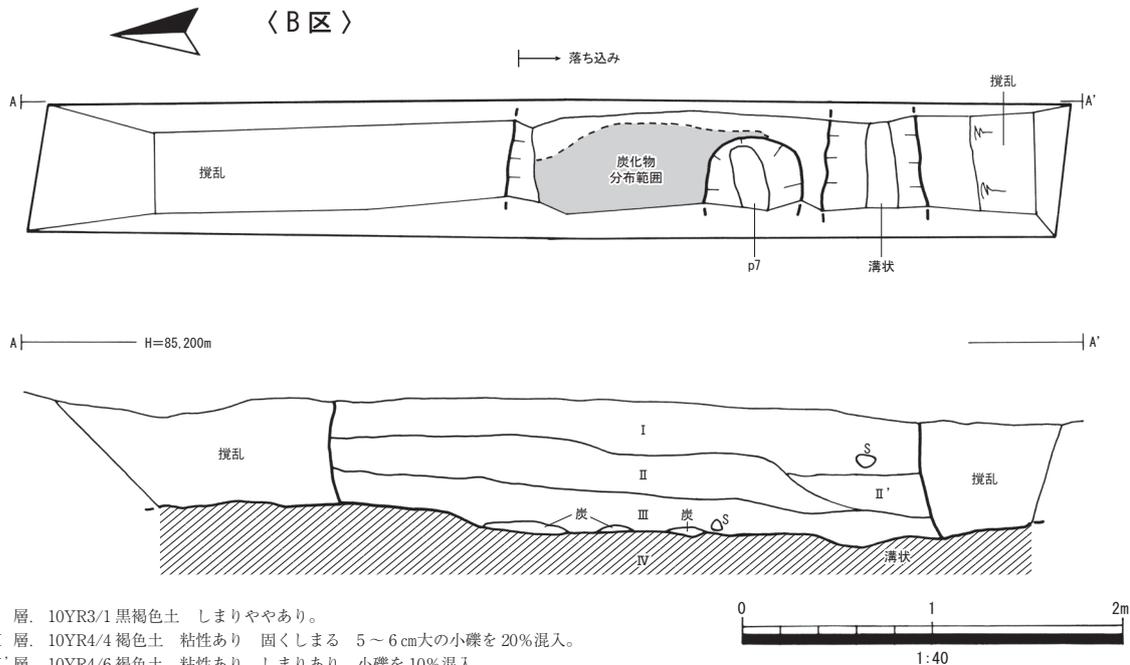
- A層. 10YR5/6 黄褐色土 非常に固くしまる 10YR4/2 灰黄褐色土を混入 人為的に埋め戻し。

〈p6〉

- A₁層. 10YR4/3 におい黄褐色土 固くしまる 上位に扁平な礫や小礫を若干含む 炭粒を若干混入。IV層の粒子〜小ブロックを30%混入 肥前磁器の破片混入。
- A₂層. 10YR3/2 黒褐色土 しまりあり 15cm大の礫を多く混入 炭粒を若干混入。



第10図 花巻城跡三之丸 A区



- I 層. 10YR3/1 黒褐色土 しまりややあり。
- II 層. 10YR4/4 褐色土 粘性あり 固くしまる 5~6cm大の小礫を20%混入。
- II' 層. 10YR4/6 褐色土 粘性あり しまりあり 小礫を10%混入。
- III 層. 10YR4/1 褐灰色土 粘性あり しまりあり
下位のIV層直上付近に炭化物ブロックを混入。下位より磁器片を出土。
- IV 層. 10YR5/8 明褐色土 粘性強 固くしまる
北半部では、攪乱により上面を削平される。

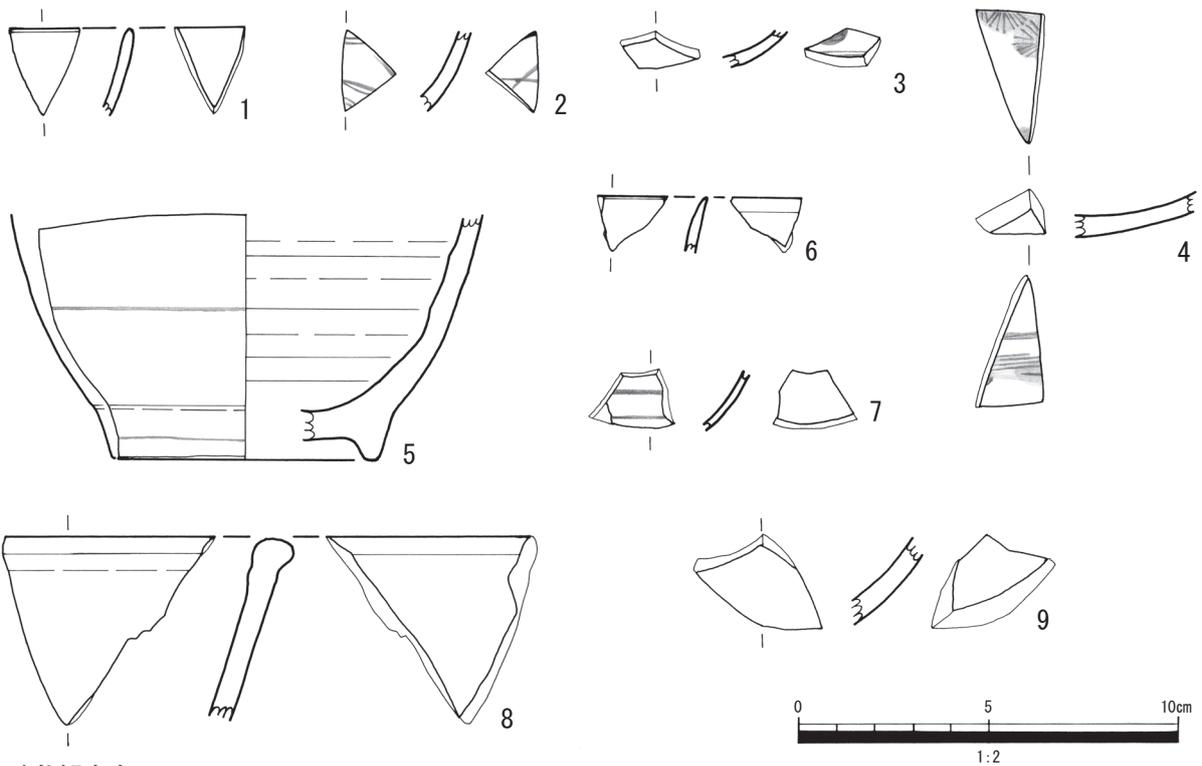


表 4 出土遺物観察表

■陶磁器

掲載番号 図 番号	登録 番号	遺構名	出土地点	出土層位	種類	器種	部位	時期	産地	文様等	技法	釉ほか	計測値			備考
													口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	
11	1	—	A区	廃土中	磁器	碗	口縁	1690~1780年	肥前	—	—	—	—	—	(23)	染付碗か
11	2	溝状	B区	検出面	磁器	碗	体部	1690~1780年	肥前	草花文?	—	染付	—	—	(22)	
11	3	509	—	廃土中	磁器	皿	体部	1690~1780年	肥前	草花文?	—	染付	—	—	(10)	
11	4	508	南半落ち込み	B区	III層下位	磁器	皿	体部	1690~1780年	肥前	草花文	—	染付	—	(12)	
11	5	501	p6	A区	埋土	磁器	瓶	体~高台	1690~1780年	肥前	—	—	染付	—	(70)	(65)
11	6	503	—	A区	攪乱	陶器	碗	口縁	18世紀	大塚相馬	—	—	灰釉	—	—	(15)
11	7	504	—	A区	攪乱	陶器	碗	体	18世紀?	在地産?	鉄絵	—	外:白濁釉 内:透明釉	—	—	(16)
11	8	506	—	A区	廃土中	陶器	鉢	口縁~体	18世紀?	在地産?	—	—	白濁釉	—	—	(50)
11	9	502	—	A区	III層	陶器	碗	体	18世紀?	在地産?	—	—	長石釉	—	—	(22)

※ () は残存値または推定値

第 11 図 花巻城跡三之丸 B区及び出土遺物



A区 完掘全景（北西から）



p1・p2 断面（南から）



p3 断面（西から）



p4 断面（西から）

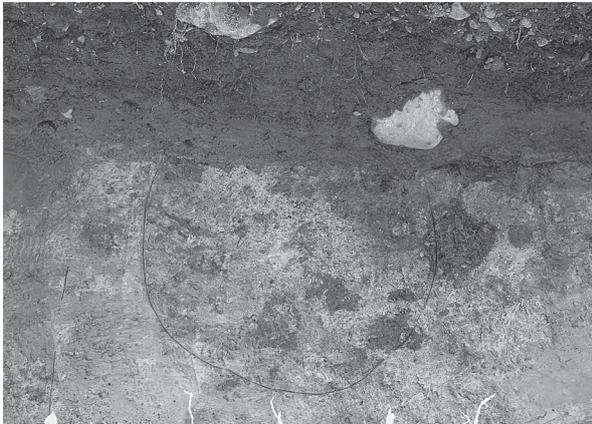


p6 遺物出土状況（西から）

写真図版 6 花巻城跡三之丸 A区



B区 完掘全景（南東から）



p7 完掘（東から）



溝状 完掘（東から）

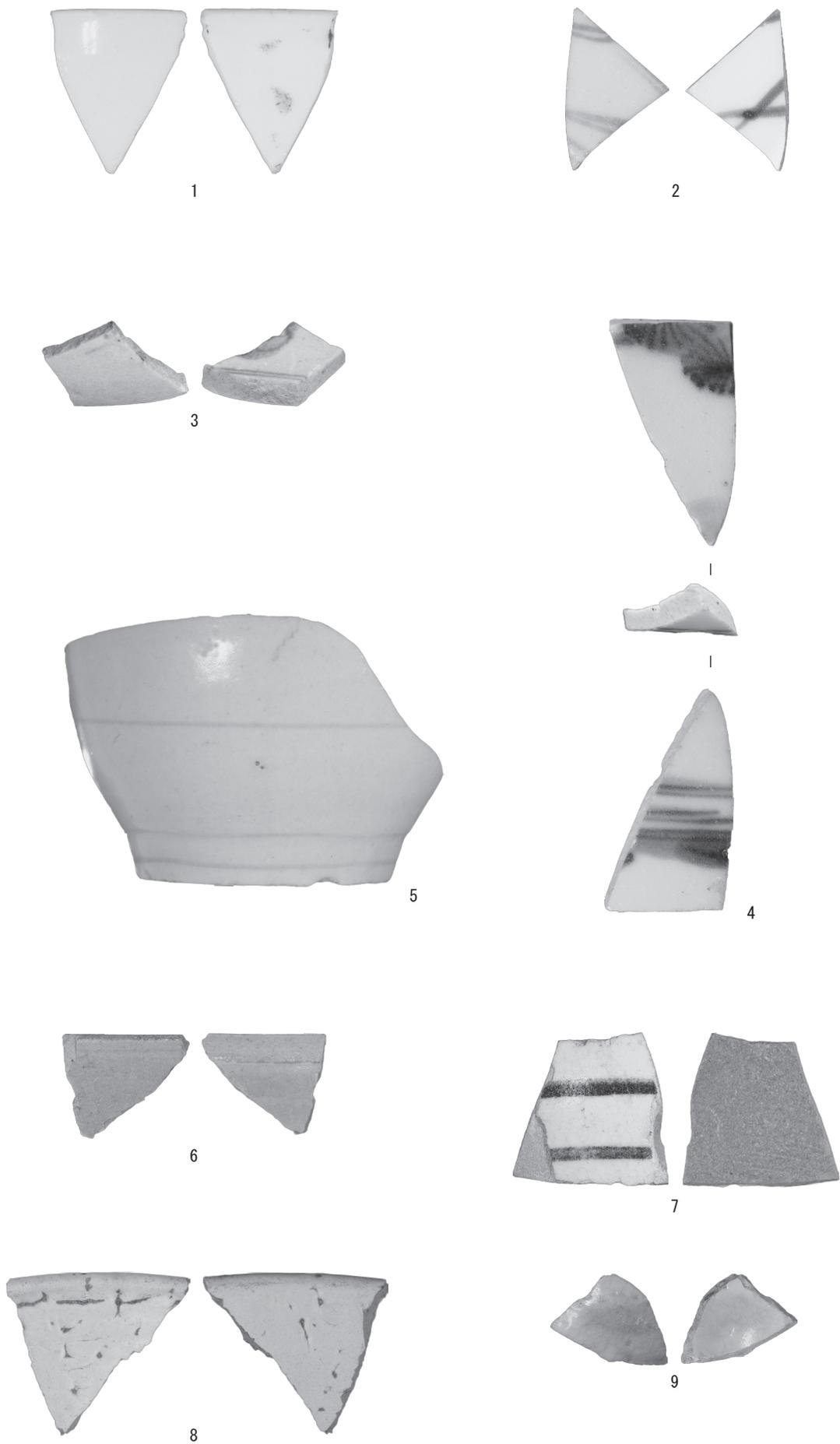


B区 重機作業状況



作業風景

写真図版 7 花巻城跡三之丸 B区ほか



写真図版 8 花巻城跡三之丸 出土遺物

花巻城跡下堀 試掘調査報告

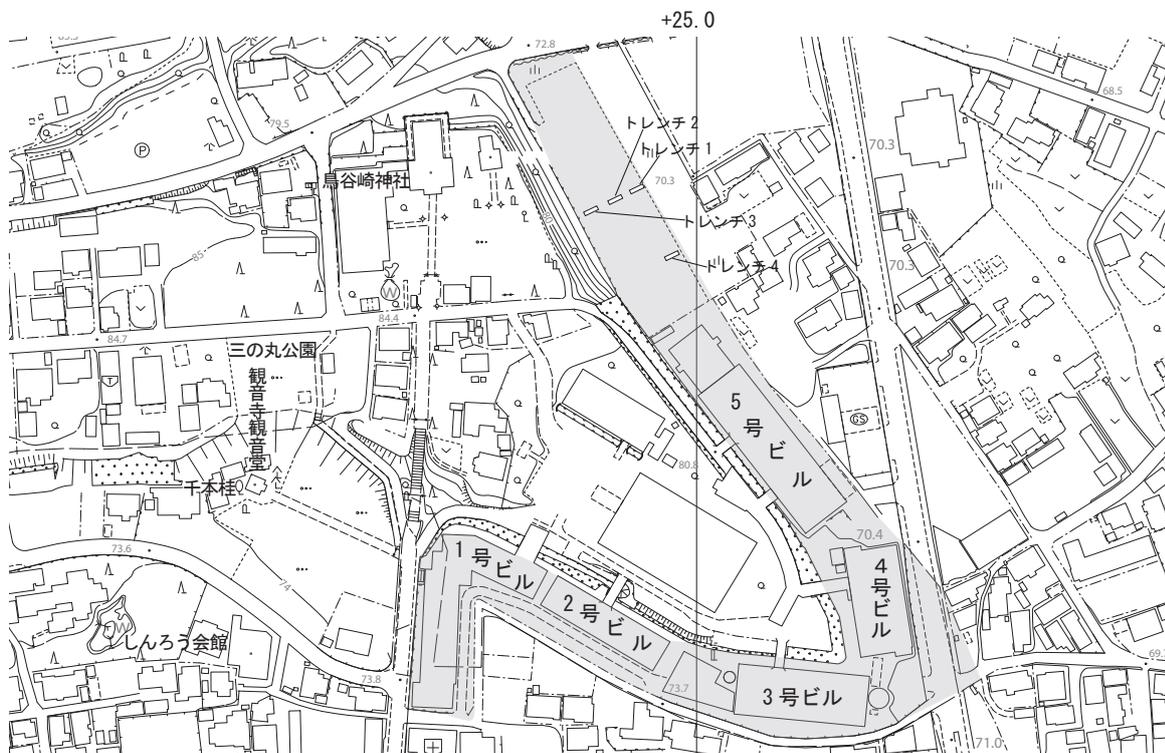
I. 調査に至る経過

花巻城東辺の防御施設である下堀跡（第8図）には、新興製作所工場1号ビル～5号ビルが建っていた。平成19年に同社が移転し、その後は開発計画を持つ仙台市のメノアース株式会社（代表取締役熊谷覚氏）が工場跡地の土地所有権を取得した。

平成28年1月、メノアースより業務を請け負った仙台市の(株)光が、工場の解体工事を開始することとなった。(株)光からは、建物基礎撤去のため掘削するとの説明があり、花巻市教育委員会では(株)光を通じてメノアースに対し文化財保護法に基づき、基礎解体工事に係る発掘届を提出するよう連絡した。その後、メノアースの熊谷氏からは(株)光を代理人として、平成28年2月16日付で3・4号ビル、同3月7日には1・2号ビルの各基礎解体工事に係る発掘届が提出された。5号ビルは解体日程の関係で、同6月20日に提出されている。

花巻市教育委員会では発掘届を受理し、遺跡の状況を確認する必要から、基礎の解体に際して工事立会を行うことをメノアースの熊谷氏へ通知した。

発掘届添付の図面によると、工場の基礎底面は深いところで現況グラウンドレベルから約4～6mであり、その下に杭が打ち込まれている場所もあるとのことであった。よって、ある程度の深さまで攪乱が及ぶことが考えられたが、もとより下堀の規模に関する基礎的情報を花巻市教育委員会では持ち合わせておらず、工事立会に対応するための目安とするべきデータが必要であった。そこで花巻市教育委員会では、堀の形状と深度及び埋没状況に関する情報を得るため、試掘調査を計画した。メノアースの同意と(株)光の協力が得られたことから、試掘調査は、平成28年5月16日に実施した。



第12図 花巻城跡下堀 調査区位置図

Ⅱ. 調査概要

(1) 調査体制

調査担当者：酒井 宗孝・中村 良幸・菊池 賢・橋本 征也

(2) 調査区の選定

試掘調査の実施場所については、当時工場ビル上屋の解体作業が実施中であったことから、(株)光との打ち合わせにより、工事に支障の無い場所において行うこととした。具体的には5号ビルの北西側の空地部分は解体工事で当面使用の予定は無く、メノアースからも問題が無い旨の回答が得られたことから、同所にて行うこととした(第12図)。

(3) 試掘方法と記録

試掘は、0.4m³のバケットを装着したバックホーを使用しトレンチを掘削し、壁面の立ち上がりや深度を確認した。掘削は、掘幅の方向に連続的に実施することとしたが(トレンチ1～3)、適宜追加掘削をおこなった(トレンチ4・5)。

トレンチ平面位置の記録には光波測距儀を用い、記録データはパソコンソフトにより図化した。断面記録は、測量データ等を基に机上で作図した。

写真撮影は、デジタル一眼レフカメラ1台により行った。記録方式はJPEGである。撮影前には、対象を記録した「撮影カード」を初めに撮影し、整理作業の混乱を避けるようにした。

Ⅲ. 検出された遺構と出土遺物

(1) 各トレンチの様相

〔トレンチ1〕(第13図：トレンチ1断面略測図、写真図版10)

下堀の東縁と推測される位置に設定した。掘削の結果、トレンチ東端では表土から30cmの深さでコンクリート側溝が検出されたため、掘り込み面の確認はできなかった。ただし、壁面と堀底は検出された。すなわち、壁面の傾斜角度は、底に対して約48°で外傾していた。

また、堀底には黒褐色を呈する粘性のある自然堆積層があり、植物遺存体(芦のようなもの)を含んでいた。埋土は1.8m程度の厚い盛り土で一様に被われているので、一度に埋め立てられたことが分かる。

〔トレンチ2〕(写真図版10)

掘幅の中央付近に設定した。トレンチ1と同様に厚い盛り土に覆われており、その下には層厚約80cmの黒褐色の自然堆積層がある。堀底は、現況グラウンドレベルから約2.8m下で検出された。

〔トレンチ3〕(写真図版10)

堀の西縁付近に掘削した。ここではトレンチ2と同様の結果を得られたが、堀底は現況グラウンドレベルから約2.9m下で検出されている。

〔トレンチ 4〕

トレンチ 1 で堀の東縁と推定される位置には側溝が入っており、掘り込み面を破壊していることが分かったのであるが、この攪乱状況はどの程度の広がりをもつのか、つまり下堀東縁の掘り込み面は残存しているのかどうか追加調査するため、トレンチ 4 を設定した。

トレンチ 4 は、トレンチ 1 の南側へ約 30 m で、なおかつ堀の東縁と推測される位置に掘削した。その結果、ここでもコンクリート側溝が検出された。トレンチ 1 から続く一連のものであろう。このことから、調査区周辺における東縁の掘り込み面が残存する可能性は低いものと推測された。

〔トレンチ 5〕（写真図版 10）

最後に、トレンチ 2 の南側約 26 m の位置にてトレンチ 5 を掘削した。堀底までの深度は、どこでも一樣なのかどうか調査するためである。掘削の結果、現況グラウンドレベルからおよそ 2.7 m で堀底が検出され、トレンチ 1～3 の状況とほぼ変化の無いことが確認できた。

(2) 出土遺物（第 13 図）

遺物はトレンチ 3 にて、盛り土（埋め立て土）中から近現代の磁器破片が 2 点出土したのみで、近世の遺物は確認されなかった。

第 13 図 1 は内外面に染付で草花文を施した鉢とみられる。第 13 図 2 は小型の鉢で、外面に染付で天橋立の絵などが型刷りされている。

IV. まとめ

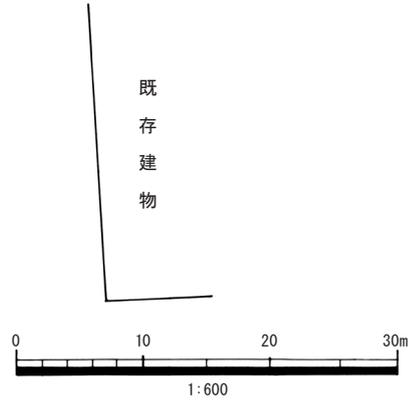
国土地理院が提供している昭和 23 年の米軍航空写真によると、その当時の下堀は、低地を利用した水田となっていたことがわかる。その後は埋め立てられて工場用地などとして使われ、今回試掘調査を実施した部分については、最近まで花巻東高等学校のグラウンドとなっていた。

恐らく、そのような戦後の土地利用の変化により堀跡は部分的に攪乱を被ることになったのであろう。試掘調査で検出された側溝などは、何の施設に付属したのか不明であるが、いずれにしてもその規模は大きいため、堀の東縁の掘り込み面を破壊しているものと考えられる。ただし、今回試掘した部分について言えば、堀底や東側壁面の下部においては残存状況が良好であることも分かった。

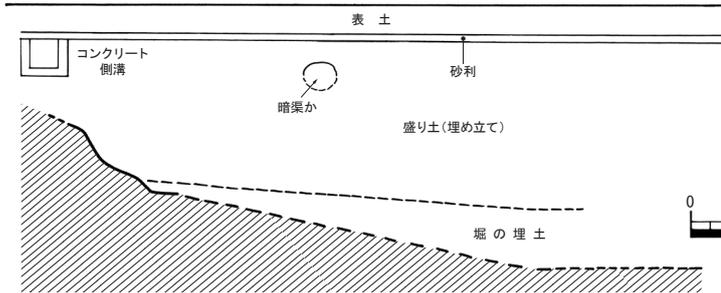
さて、試掘で得られたデータを基にして、下堀の断面形状を推定したのが第 13 図〈三之丸～下堀高低図〉である。トレンチ 1・2・3 付近から三之丸内に鎮座する鳥谷崎神社にかけて、堀底から段丘面上までの高低差を示したものである。堀の東壁は底面から約 48° の角度で外傾し、堀底は平坦であると推測される。これだけ見ると箱堀の形態を呈するものと考えられるが、試掘規模が狭いことから、底面形状に関してはごく一面しか見ていない可能性もあり、これをもって下堀跡全体に当てはめて推測している訳ではない。規模については、上幅が約 32m、深さは 2.8～2.9m となる。

このように、下堀について、今後の開発行為等に対応する際の目安を得ることができた。関係各位に感謝申し上げます。

（以上、文責 菊池）



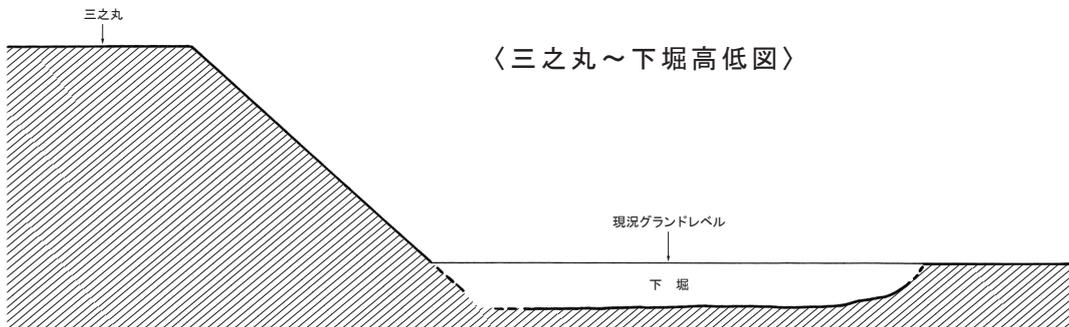
E |----- H=70.400m -----| W



トレンチ1断面略測図



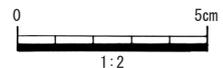
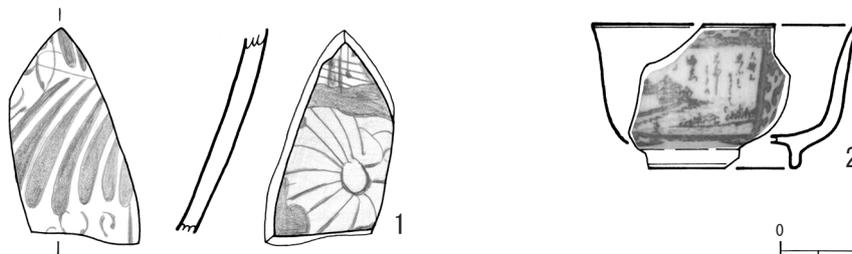
W |----- H=90.000m -----| E



三之丸～下堀高低図



出土遺物



磁器

掲載番号	登録番号	遺構名	出土地点	出土層位	種類	器種	部位	時期	産地	文様等	技法	釉ほか	計測値			備考
													口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	
13	1	溝跡	トレンチ3	盛土	磁器	鉢?	体部	近現代	不明	草花文	—	染付	—	—	(55)	
13	2	遺構外	トレンチ3	盛土	磁器	鉢	口縁	近現代	不明	—	—	染付	(70)	(40)	38	天橋立の絵

表5 出土遺物観察表

※ () は残存値または推定値

第13図 花巻城跡下堀 試掘調査成果



調査区近景（南から）

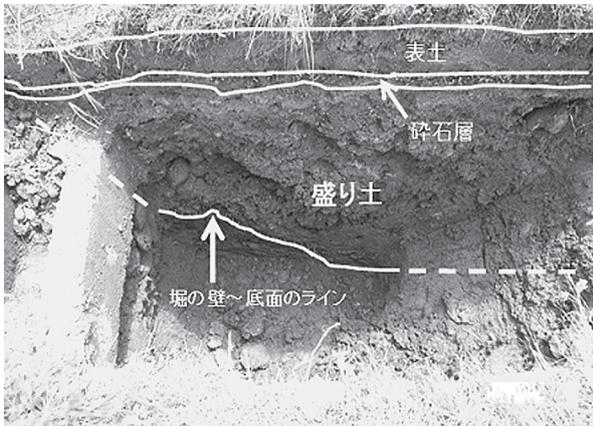


調査区近景（北から）

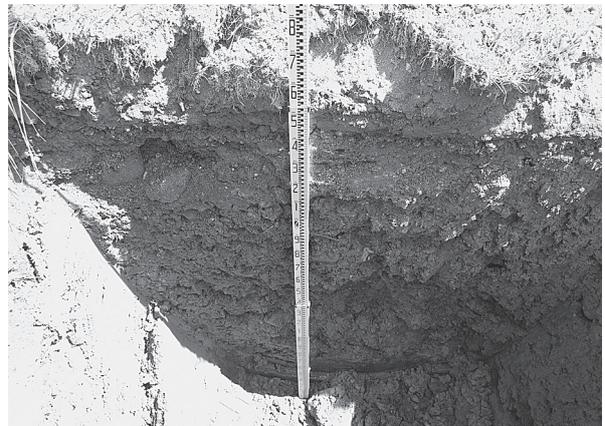
写真図版 9 花巻城跡下堀 (1)



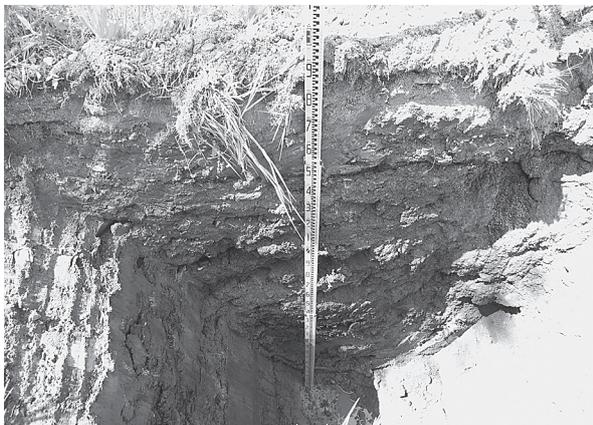
トレンチ1 東側断面（北から）



トレンチ1 東側断面（北から、加筆）



トレンチ2 断面（北から）



トレンチ3 断面（南から）



トレンチ5 断面（南から）

写真図版 10 花巻城跡下堀 (2)

花巻城跡三之丸（新興製作所跡地）試掘調査報告

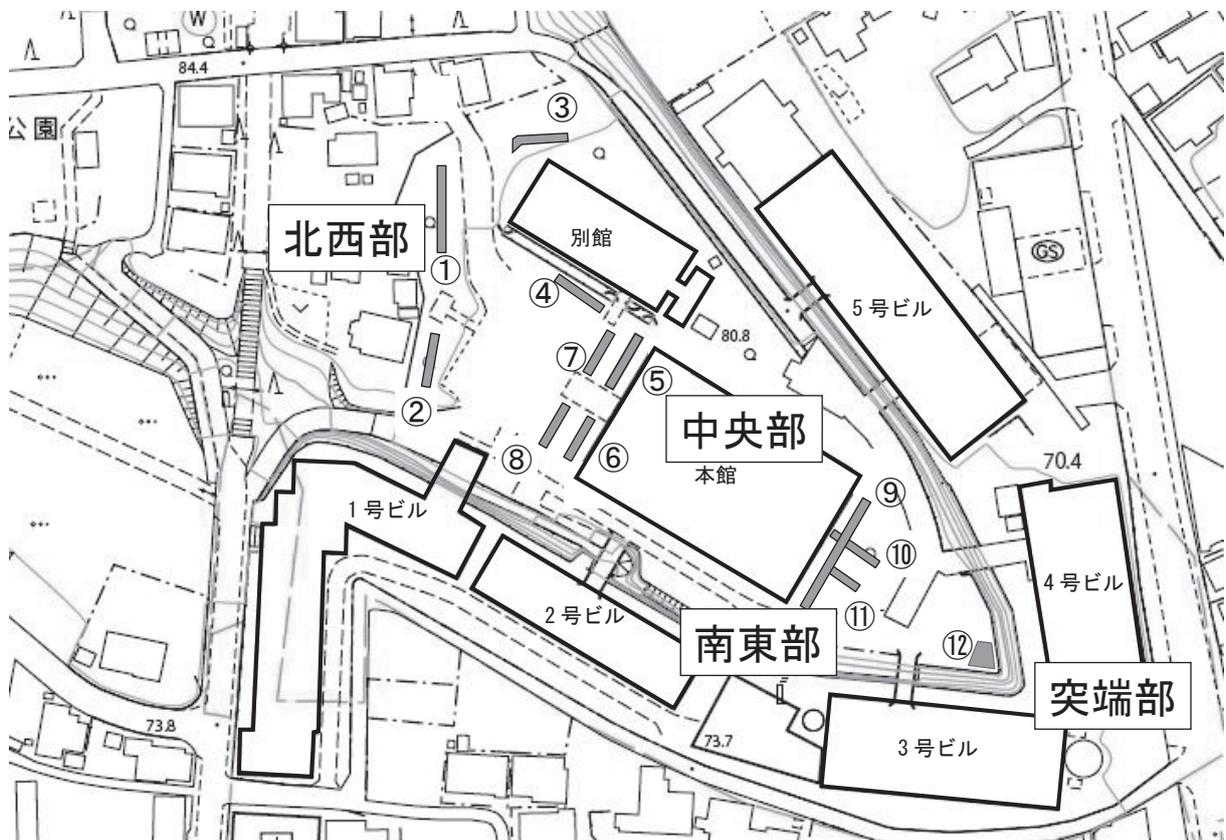
I. 調査に至る経過

新興製作所旧工場用地の土地所有権を得ていたメノアース株式会社より、下堀跡における工場ビルの基礎解体工事に関連して発掘届が提出されたことは既述した（26 ページ）が、加えて同社からは工場用地内の上部平坦地に建つ本館ビルと別館ビルの基礎解体工事に係る発掘届も提出されていた。やはり、基礎解体に際して掘削作業を伴うためである。本館ビルと別館ビルが建つ場所は、花巻城跡三之丸の南東隅付近で段丘が突出した部分である。

具体的には、平成 28 年 3 月 7 日付で 1・2 号ビルとあわせてメノアース株式会社より代理人（株）光を通じて、発掘届の提出を受けた。花巻市教育委員会では発掘届を受理し、遺跡の状況を確認する必要から、花教文第 2-0121 および花教文 2-0123 により基礎解体時の工事立会を通知した。

その後、新興製作所跡地のうち法面を含む上部平坦地について、平成 28 年 6 月に、所有者であるメノアース株式会社から売買交渉権限を得ている（株）光より本市に対し有償譲渡の申し出があった。このことに対して市は、「花巻市による新興製作所跡地上部平坦地の購入価格は、当該土地の不動産鑑定評価額から、当該土地上に建物を建設するか否かにかかわらず必要となる当該土地擁壁の補修金額を差し引いた金額を超えないこと」、「新興製作所跡地上部平坦地取得検討の前提として、また、花巻市による購入価格算定の前提として、花巻市またはその委託業者が当該土地擁壁補修の必要性調査、及び本館・別館の底地を除く上部平坦地の文化財試掘調査を行うこと」の 2 点を方針として（株）光に示した。その後、市による上部平坦地における埋蔵文化財調査の実施について、同社齋藤社長から協力の申し出があり、試掘調査実施となったものである。

調査区所在地の地番は花巻市内 32-10、試掘調査期間は平成 28 年 9 月 13 日から同 9 月 16 日である。調査面積は 330㎡である。



第 14 図 花巻城跡三之丸（新興製作所跡地）調査区位置図

Ⅱ．調査概要

(1) 調査体制

調査担当者：菊池 賢・酒井 宗孝・中村 良幸・橋本 征也・高橋 純・吉田 宗平

(2) 調査方法

調査対象面積は、上部平坦地のうち本館、別館等の建築部分約 3,134㎡を除く約 7,524㎡である。ここに試掘トレンチ 12 か所を設定し（第 14 図）、埋蔵文化財の有無を調査した。トレンチ設定箇所は、本館基礎と別館建屋が未解体の状況であったことから、それ以外の空閑地において計画した。また、将来の解体工事に支障がない範囲で、一部アスファルト舗装面を破砕し、掘削調査を行った（トレンチ⑦・⑧・⑫）。

(3) 基本土層

試掘の前提として過去の花巻城跡発掘調査で確認された基本土層の知見を考慮して調査を行ったが、その内容は下表のとおりであり、以下の報告もこれに準ずる。

層名	内 容
I 層	現在の表土層。
II 層	近世の遺物を含む層で、花巻城時代の堆積層と考えられる。
III 層	暗褐色ないし黒褐色土。近世以前、中世・古代～縄文時代までの遺物を包含する層。一部に人為的な堆積層を挟む。
IV 層	白色ないし黄褐色の粘土層。段丘構成層の最上部の地層。

Ⅲ．検出された遺構と出土遺物

以下では、便宜的に調査区を**北西部**・**中央部**・**南東部**・**突端部**の 4 つのエリア（第 14 図）に分け報告する。

(1) 北西部の調査

新興製作所跡地の北端から西縁にかけての北西部は、武家屋敷が軒を連ねていた「館小路」に近接する場所である（第 18 図・第 19 図）。ここでは、館小路に近い部分とその周辺部においてトレンチ①～③を設定した。現況は、植え込みと本館・別館以前の建物跡地である。

[トレンチ①]（第 15 図、写真図版 11・12）

トレンチ①は、新興製作所跡地内の北西部分において、幅約 2.0 m で南北方向に約 20 m の長さを設定した。当トレンチにおける堆積土の様相は次のとおりである。

- I 層 黒褐色土 現表土層で、層厚 10～20cm。
- II 層 褐色土を主体 砂礫を多く含んでおり、層厚 15～20cm。
- III 層 褐灰色土 炭粒を少し含む。粘性が強く、しまりも密である。
- IV 層 褐色粘土 層厚不明。

遺構の検出は、トレンチ掘削当初は表土除去後にⅡ層上面にて実施を試みた。Ⅱ層を花巻城時代の近世の遺物を包含する層と想定したためである。しかしながら、遺構の判別は難しく、また攪乱も見られる状況であったため、更に掘り下げを行わざるを得ず、Ⅳ層上面に至ってから遺構の形状が認められた。なお、Ⅲ層は、トレンチ掘削時には識別が難しく、掘削後の土層断面で確認をしたものである。

Ⅳ層の上面を遺構検出面として広げてみた結果、トレンチの北半部から柱穴状土坑 13 基・土坑 3 基・溝跡 2 条が検出された（写真図版 11 中央）。これらの規模と形状は、柱穴状土坑が直径約 20～40cm の円形を呈するものが多く、土坑は約 1m×1m の規模を持つ方形のものが 2 基、長軸約 1m×短軸 0.7m の長方形のものが 1 基である。このうち、トレンチ中央付近の 1m×1m 程度の方形の土坑について半截したところ、埋土は褐灰色を呈し、深さは約 10cm であった（写真図版 12 上段）。遺物は出土せず、性格は不明である。一方、トレンチ南半部では明瞭に遺構と判断できるものは確認されなかった。

遺物は、トレンチ①の北半部において、遺構検出時に近世の肥前磁器の口縁部破片が 1 点出土している（第 17 図）。器種は染付の碗とみられる。

[トレンチ②]

トレンチ②は、トレンチ①の南側約 20m の地点において、幅約 2.0m で南北方向に約 10m の長さを設定した。当トレンチにおける堆積土の様相は次のとおりである。

- Ⅰ層 黒褐色土 現表土層で、層厚 10～20cm。
- Ⅱ層 黒褐色土や粘土ブロック、礫の入り混じった層。層厚約 40cm。
- Ⅳ層 白色ないし黄褐色粘土 層厚不明。

当トレンチで確認したⅡ層は、トレンチ①で確認したものと比べると黒褐色土の割合が多く、厚く堆積している。トレンチ①と同様に、Ⅱ層上面での遺構検出は困難であり、更に掘り下げを行ったところ、Ⅲ層を欠き、Ⅳ層が直下に検出されている。

当トレンチにおけるⅡ層は、その様相からみて明らかに人工的な堆積土層とみられるが、直下にⅣ層の粘土層が検出されることから、過去に削平等の地形改変が行われていたことが分かった。

Ⅱ層除去後、Ⅳ層の上面において遺構検出を実施したが、確認されなかった。また、当トレンチで遺物は出土していない。

[トレンチ③]（第 15 図、写真図版 12）

トレンチ③は、新興製作所跡地の北端付近において、幅約 2.0m で東西方向に約 15m の長さを設定した。当トレンチにおける堆積土の様相は、次のとおりである。

- Ⅰ層 工場敷地造成土 層厚 20cm。
- Ⅱ層 褐色土を主体 砂礫を多く含んでおり、層厚 30～35cm。
- Ⅲ層 褐灰色土 層厚 20cm。
- Ⅳ層 白色ないし黄褐色粘土 層厚不明。

このトレンチでもⅡ層上面での遺構検出を試みたが難しく、Ⅳ層上面まで掘削して遺構の確認を行った。Ⅲ層は、トレンチ掘削時には識別が難しく、掘削後の断面で確認をしたものである。Ⅳ層上面での遺構検出の結果、柱穴状土坑 40 基と竪穴状の遺構 1 棟を検出した。

柱穴状土坑は、直径10～40cm程度の円形を呈している。トレンチ内全域に分散して検出されており（写真図版12中央）、一定の柱穴配列の把握はできなかった。

また、トレンチ西端付近にて方形気味の形状を呈する遺構を検出した（写真図版12下段）。規模は東西方向が約2.2m、南側はトレンチ外に延びるが、約2.4mを検出した。検出状況では、埋土の東側部分は黒褐色を呈し、西側部分は黄褐色を呈する。東側の黒褐色土の方が埋土の上位で、黄褐色土に被っている。この堅穴状の遺構は、形態からみて堅穴建物跡の可能性はあるが、詳細な時期は不明である。柱穴状土坑との重複関係は、柱穴に先行する場合と先行しない場合とがあり、一様ではない。なお、埋土からは平安時代の須恵器甕の体部破片1点が出土している（第17図）。

(2) 中央部の調査

トレンチ④～⑧は、本館北西部の広場における埋蔵文化財の残存状況確認を目的に設定した。現況は、本館・別館の外周を除き、アスファルト舗装面が多くなっている。

[トレンチ④]

別館南側の植え込みにおいて、北西から南東にかけて幅約1.5mで長さ約4mを設定した。当トレンチにおける堆積土の様相は、次のとおりである。

I層 黒褐色土 現表土層で、層厚20cm。

IV層 白色ないし黄褐色粘土 層厚不明。

表土直下にIV層が確認されたことから、削平されていることがわかった。IV層上面で遺構検出を行った結果、円形の柱穴状土坑2基を確認した。柱穴の規模は、直径20～30cm程度である。なお、当トレンチから遺物は出土していない。

[トレンチ⑤]

本館建物の北西隅付近において、北東から南西にかけて幅約2.0mで長さ約10mを設定した。当トレンチにおける堆積土の様相は、次のとおりである。

I層 黄褐色土 層厚40cm。

IV層 黄褐色粘土 層厚不明。

I層は、敷地造成の際の盛土層である。敷地造成の際に削平されているとみられ、I層の直下でIV層が検出された。

IV層上面で遺構検出を行った結果、円形の柱穴状土坑1基を確認している。柱穴の規模は、直径約30cmである。なお、当トレンチから遺物は出土していない。

[トレンチ⑥]（第15図、写真図版13）

本館建物の南西隅付近において、北東から南西にかけて幅約2.0mで長さ約10mを設定した。当トレンチにおける堆積土の様相は、次のとおりである。

I層 黄褐色土 層厚40cm。

IV層 白色粘土 層厚不明。

I層は、敷地造成の際の盛土層である。敷地造成の際に削平されているとみられ、I層の直下でIV層が検出された。

IV層上面で遺構検出を行った結果、トレンチの南半から柱穴状土坑7基・土坑3基を確認している。柱穴状土坑は円形を呈し、規模は直径約20～30cmである。土坑は、円形気味の平面形を呈するものが1基あり、規模は直径約70cmである。他の2基は、一部分を検出したのみであり、平面形や規模は不明である。

トレンチ北半部については、敷地造成に伴う攪乱のために、IV層の削平が南半部よりも若干深くなっていた。このために雨水等がたまって、十分な遺構検出ができなかった。なお、当トレンチから遺物は出土していない。

【トレンチ⑦】（写真図版13）

本館建物の北西隅付近において、トレンチ⑤の西側に幅約2.0mで長さ約8mを設定した。ここは、工場のアスファルト舗装がなされていた場所である。当トレンチにおける堆積土の様相は、次のとおりである。

- I層 工場敷地造成土 アスファルトの下はコンクリート舗装され、更にその下は黄褐色土の盛土がある。
層厚40cm。
- Ⅲ層 褐灰色土 層厚不明。トレンチの南半で検出される。
- IV層 黄褐色粘土 層厚不明。

この場所も敷地造成により削平されており、トレンチの北半部ではI層の直下にIV層が確認される。トレンチの南半部では、I層の直下に褐灰色土が確認された。この褐灰色土はIV層の上を覆っており、トレンチ①・③で検出されたⅢ層と同じ色調であることから、これが削り残されたものと考えられる。

トレンチの北半では、IV層上面において幅約1.5m程度で帯状に延びる黒褐色土の広がりを検出した。北東から南西方向にかけて延びており、形状からみて溝跡と推測した。トレンチの南半では、Ⅲ層の上面にて掘削を止め遺構検出を行ったが、確認はできなかった。なお、当トレンチから遺物は出土していない。

【トレンチ⑧】

本館建物の南西隅付近において、トレンチ⑥の西側に設定した。幅約2.0mで長さ約9mを掘削した。ここもトレンチ⑦同様に、アスファルト舗装されていた場所である。当トレンチにおける堆積土の様相は、次のとおりである。

- I層 工場敷地造成土 アスファルトの下はコンクリート舗装され、更にその下は黄褐色土の盛土がある。
層厚40cm。
- IV層 白色ないし黄褐色粘土 層厚不明。

敷地造成による削平で、トレンチ全体でI層の直下がIV層となっている。IV層上面で遺構検出を行った結果、トレンチ北半部から円形気味の柱穴状土坑2基が確認されている。規模は直径20～30cmである。なお、当トレンチから遺物は出土していない。

(3) 南東部の調査

本館の東側には建物が無かったことから、敷地造成などの攪乱が比較的少ないエリアと推測された。ここにはトレンチ⑨～⑪を設定したが、調査の結果、各トレンチを貫く堀跡が1条検出されているので、以下では各トレンチの様相を交えながら一括して述べる。

[トレンチ⑨～⑪] (第 16 図、写真図版 13・14)

調査はトレンチ⑨の掘削から開始した。トレンチ⑨は本館建物の東壁面に平行して南西～北東方向にかけて掘削した。当トレンチにおける堆積土の様相は、次のとおりである。

- I a 層 黒色土 現表土層で、層厚 10～20cm。
- I b 層 黒褐色土 小礫を多量に含む。ゴミが入る。盛土層。層厚 25～30cm。
- I c 層 にぶい黄橙色粘土 盛土層。層厚 10cm。
- Ⅲ層 黒褐色土 層厚 5～15cm。
- Ⅳ層 白色ないし黄褐色粘土 層厚不明。

I 層は、色調や様相の違いから I a～I c の 3 層に細分される。

掘削を開始して、現在の表土層を確認した。次いで、小礫を多量に含んだ黒褐色土が検出された。この層にはビニールゴミが含まれており、現代の盛土層と考えられる。最初の層と次の層とでは、色調と混入物が異なっていることから、前者を I a 層、後者を I b 層と捉えた。

I b 層を取り除くと、黄褐色や白色を呈する粘土層が検出された。この粘土層について、当初Ⅳ層に相当するものと考え、上面で遺構検出を実施した。その結果、南側では遺構らしきものを認めなかったが、トレンチ中央よりも北寄りでは、その粘土の中に黒褐色土が広がる部分を確認された。この黒褐色土の広がりを掘り下げてみたところ、現況地表面から約 1.4 m 下まで堆積しており、その下がⅣ層の黄褐色粘土の自然堆積層となることが分かった。つまり、この黒褐色土を検出した面における周辺の粘土層は、盛土であることが確認された。この盛土は、中央部のトレンチ④～⑧において敷地造成のためにⅣ層が削平されていたことを考えると、南東部周辺においても同様の削平が行われていたかもしれず、その際に削られたⅣ層の粘土が盛られたのではないかと推測し、I c 層と捉えた。

さらにトレンチ⑨の北側では、黒褐色土の落ち込みがトレンチ⑨の北端まで延びており、ある程度の長さを持っていることも判明した。

トレンチ⑨の掘削後、黒褐色土の落ち込みの断面形状を把握するため、トレンチ⑨と直行する方向に新たにトレンチ⑩を設定した。その結果、写真図版 13 下段の状況が確認され、断面形が逆台形状を呈する堀とみられる遺構と判明した。(以下、この遺構を「堀」と呼ぶ。)

堀の規模は、上幅が約 5 m と推測され、下幅は約 80cm を計測する。底面までの深さは、現況地表面からは約 1.4 m、Ⅳ層上面からだ約 80cm を測る。形状は、底面が平坦であり、壁は底面に対して約 30° の角度で外傾している (写真図版 14 上段)。

堀が南方に向けてどのように延びるのか調査するため、新たにトレンチ⑪を追加して設定した。トレンチ掘削の結果、堀は南東方向へと緩やかに曲がって延びていることが明らかとなった。堀の平面規模としては、少なくともトレンチ⑨の北端までは延びている状況が確認されたことから、検出総延長は 20 m 以上となる。なお、堀から遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

(4) 突端部の調査

[トレンチ⑫] (第 17 図、写真図版 14)

トレンチ⑫は、舌状台地の突端部に設定した。現況は、アスファルトで舗装された状態であった。岩手県立図書館蔵『花巻城之図』(第 18 図)によると、この場所には物見櫓などの何らかの施設が描かれている。その部分を拡大した写真を第 22 図に掲げたが、台地の先端部には線描された四角形がみられる。トレンチ⑫は、そのような何らかの遺構の有無、あるいはその性格や内容などについての手掛かりを得るため調査を行ったものである。

掘削の結果、当トレンチにおける堆積土の様相は、次のとおり把握した。

I層 工場敷地造成土 アスファルトの下は碎石が敷かれている。層厚 30cm。

A層 褐色土 砂礫を多量に含む。層厚不明。

B層 黒色土 層厚不明。

ここでA層・B層としたのは、他のトレンチで同様の堆積土が見られないため、照応させて理解するのが難しかったものであり、別途このような層名を用いて報告する。

トレンチの南東側では、I層の直下に黒色土の広がりが見出された（写真図版 14 中央）。この黒色土層をB層と呼ぶ。B層は攪乱が少なく、自然堆積土層が失われずに残っていたものではないかとみられた。つまり、工場建設に伴う造成の際に改変が大きく行われなかったエリアと考えられる。

トレンチの北側と西側とでは、B層の外周部分に褐色土が見出された。この褐色土層をA層と呼ぶ。A層には、こぶし大ほどの礫や砂が多量に含まれている。また、A層とB層との層位的な関係は、A層がB層を覆っていることが確認できている。よって、A層は人為的な盛土層だと判断されるのだが、いつどういう契機で盛土されたのかは不明であった。

遺構は、B層上面において直径約 40cmの褐色土の円形の広がりとして、柱穴状土坑 1 基を確認した（写真図版 14 下段）。なお、当トレンチから遺物は出土しなかった。

IV. まとめ

9月13日から16日までの4日間に渡って、上部平坦地に12本のトレンチを設定した。その結果、平安時代から近世までの遺構と遺物とが残存していることが判明した。検出された遺構の総数は、柱穴状土坑 66 基・土坑 6 基・溝跡 3 条・竪穴状遺構 1 棟・堀跡 1 条である。以下、各エリアの様相をまとめ、若干の考察を加えた。

(1) 北西部

柱穴・溝跡・土坑が見出されているが、このエリアは岩手県立図書館所蔵の『花巻城之図』（第 18 図）によれば武家屋敷となっており、第 19 図に当該部の拡大写真を示したが、「門屋源左衛門」「中野昇平」「松岡勇次」が宛がわれた土地屋敷となっている。その三人の屋敷と、今回の試掘トレンチ位置を重ねてみたものが第 20 図である。この図からみると、トレンチ①と③は武家屋敷の範囲に含まれており、ここで検出された柱穴・土坑などの遺構には近世の武家屋敷に関係するものが含まれていると推測することができる。トレンチ①から近世の肥前磁器の破片が出土しているのも、このことに関係すると考えられよう。

このほか、トレンチ③では竪穴建物跡の可能性のある遺構が見出されており、また平安時代の須恵器甕の破片が出土して古い時期の埋蔵文化財が残存することが明らかとなった。

(2) 中央部

全てのトレンチで敷地造成による削平がみられたが、柱穴・土坑・溝跡が見出された。このエリアは上記『花巻城之図』（第 18 図）では草地として描かれているが、もりおか歴史文化館所蔵の『花巻城下図』（第 21 図）によると「中村象蔵」「中野綱之助」の武家屋敷の範囲として描かれている。この『花巻城下図』は、実際の地形と比較して見た場合、精度が低いと言わざるを得ないが、少なくとも中央部のエリアが武家屋敷として使われていた時期があったとは考えられよう。

なお、もりおか歴史文化館『花巻城下図』と県立図書館『花巻城之図』とは、共に江戸時代末頃の資料である。制作年については絵図に明記がないものの、両図には三之丸館小路の「戸田本蔵」のように同一人物の名前が見られることから、共に近い時期に制作されたことが知られる。また、もりおか歴史文化館『花巻城下図』では、三之丸館小路の「伊藤家」について、「伊藤伴治」とある。一方、県立図書館『花巻城之図』では「伊藤大八」となっている。伴治は、大八の先代にあたることから、前者の絵図が古い時期の資料と判明する。『本由緒』等によれば、先代が「伴治」と称したのは文化10年(1813)～弘化3年(1846)の間であり、「大八」が伊藤の名跡を継いだのは伴治が没した嘉永3年(1850)のことである。このことから絵図の描かれた時期は、下表のように推定される。

絵図名称	所蔵先	伊藤家当主	絵図推定制作年代
『花巻城下図』	もりおか歴史文化館	伊藤伴治	文化10(1813)～嘉永3(1850)
『花巻城之図』	岩手県立図書館	伊藤大八	嘉永3(1850)以降

(3) 南東部

堀跡が1条検出された。堀跡の検出総延長は20m以上あり、緩やかに湾曲して突端部を区画するように配置されていることが分かった。堀跡からは遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、数種類残存している花巻城の絵図面のいずれにも描かれていないことから、それ以前の時代の遺構であると考えられる。

このことに関連して、堀は、第16図の断面図に示すように「Ⅲ層」とした黒褐色土に覆われていた。この層はトレンチ①や③で検出されたⅢ層とも色調が似ており、同様の堆積層と考えたのである。そうすると、花巻城跡のこれまでの調査では、Ⅲ層を中世の遺物を含む層と考えており、堀がそれに覆われる以前に埋没していることになるので、相対的に古い時代の遺構である可能性がある。

(4) 突端部

絵図面にある櫓などの遺構は検出されず、柱穴を1基確認したのみであった。ただし、工場敷地造成などの攪乱が比較的少なく、自然地形を残す可能性が窺えた。

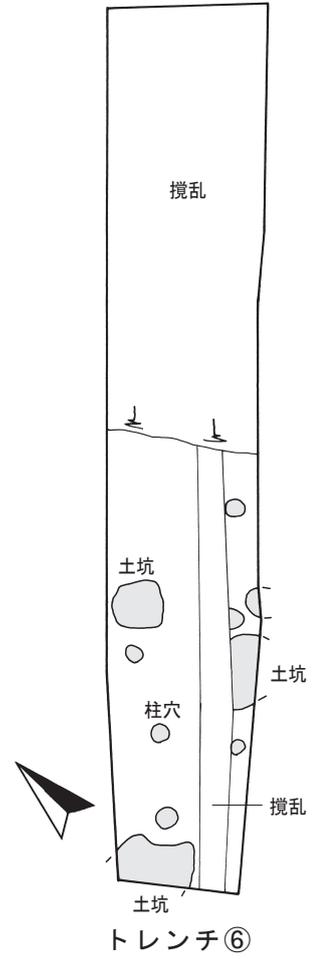
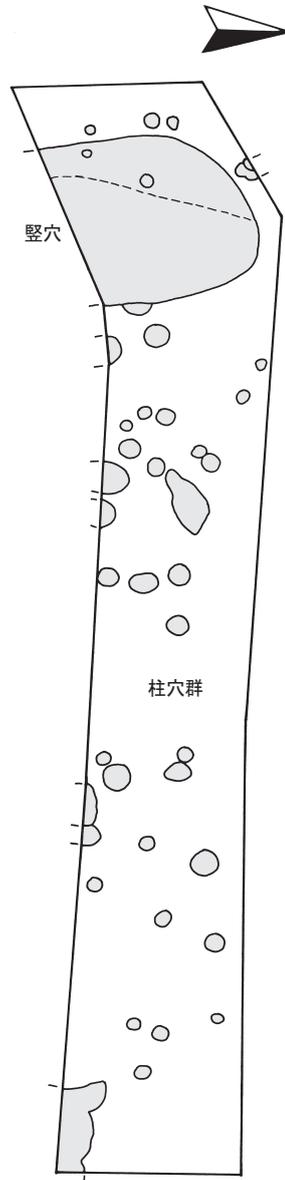
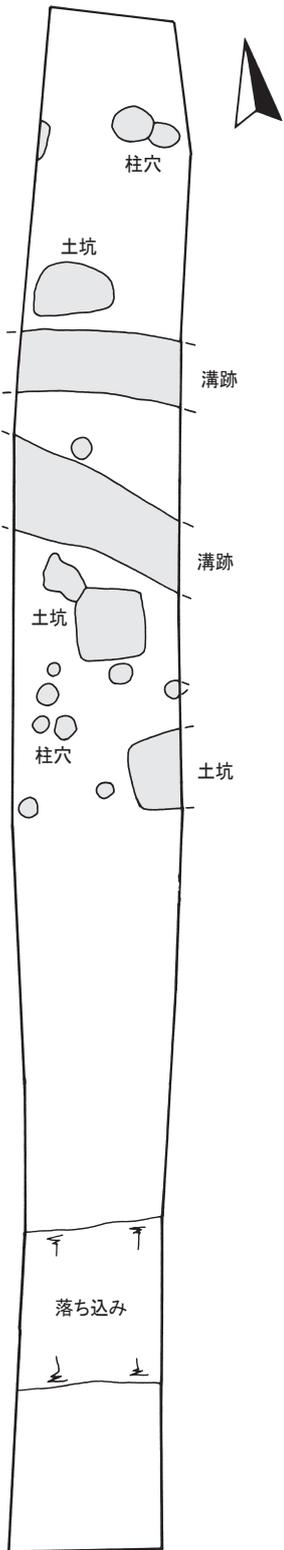
(5) 総括

以上の結果から、上部平坦地は戦前の工場建設や新興製作所の本館・別館建設の際にかなりの削平や破壊を受けてはいるものの、埋蔵文化財が残存していたことが明らかとなった。この点に関連しては、平成27年度に開催した花巻城跡調査保存検討委員会において、調査前の当該地について意見を伺った際、別館北側の地点は削平を受けていないと考えられること、突端部周辺には古い時代の城館の遺構が残っている可能性があること、浅い遺構は削られているかもしれないが堀のように深く掘り込まれたものは残っている可能性があることなどのご指摘をいただいております。今般の調査によりそのご指摘が裏付けられた結果となった。

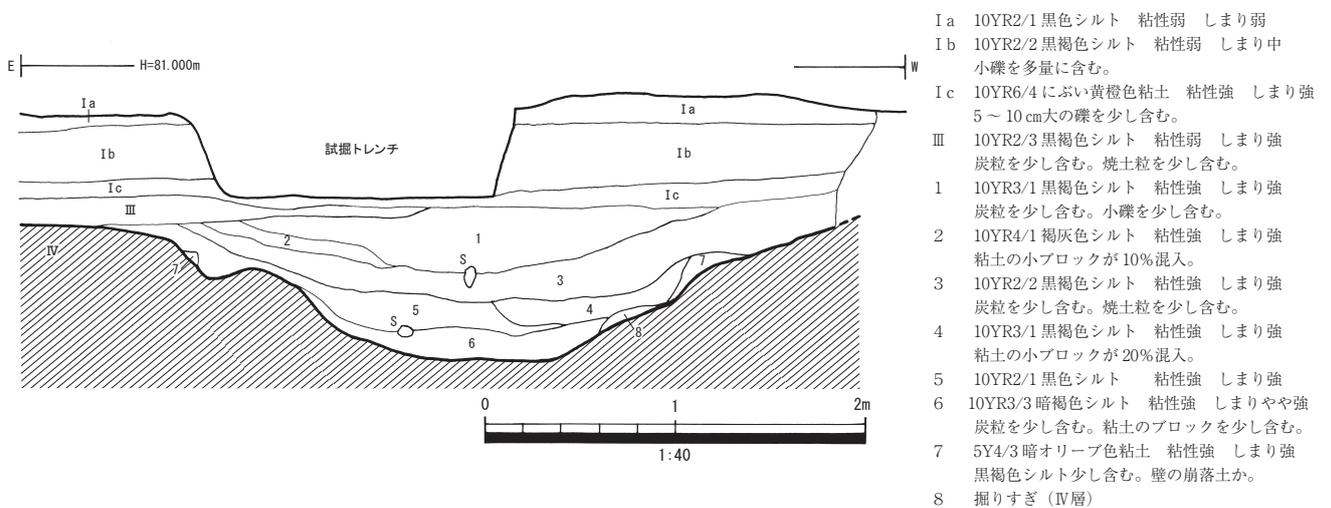
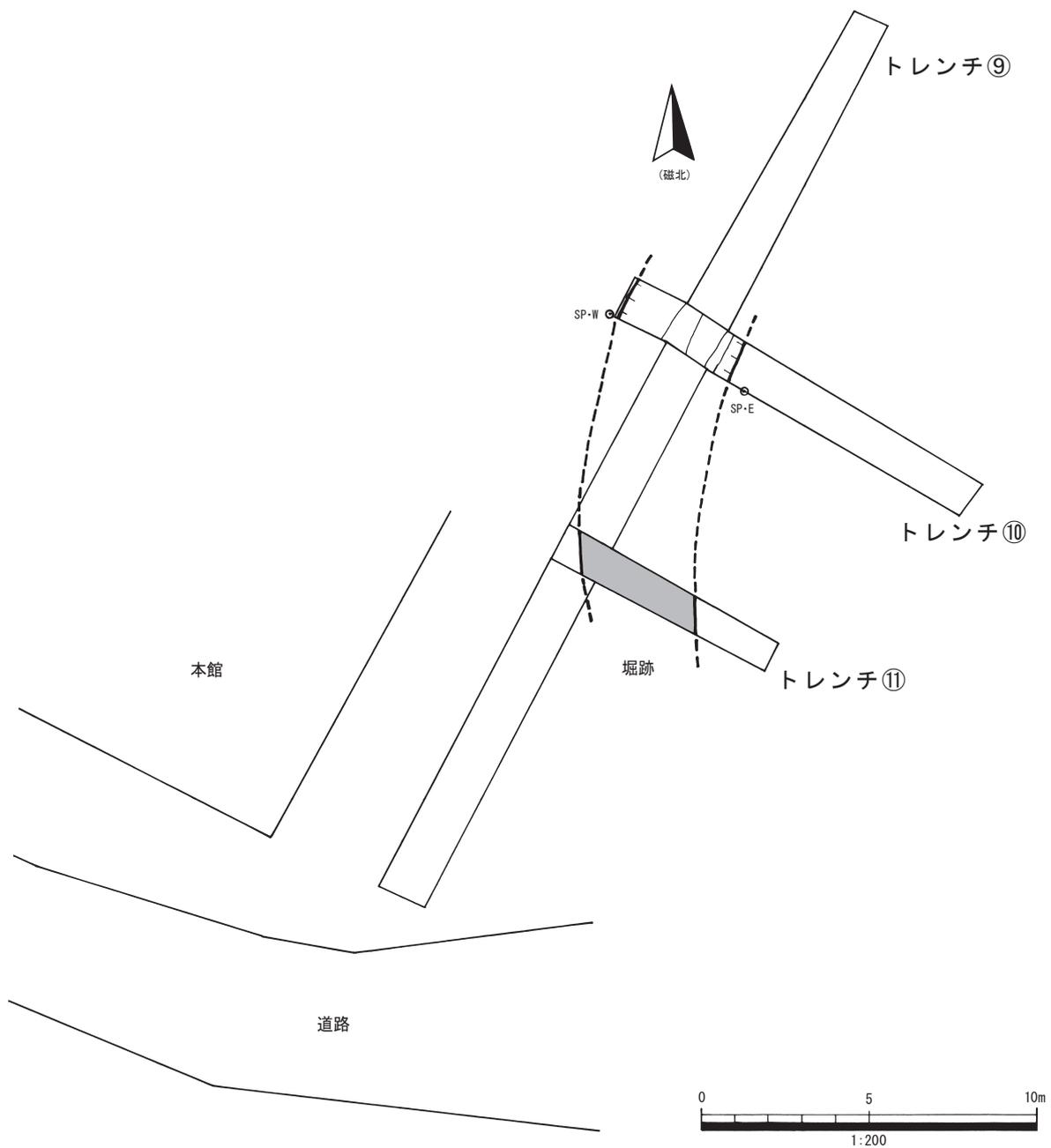
なお、今回の試掘結果については、平成28年10月3日開催の花巻城跡調査保存検討委員会において報告を行ったところでもあり、委員各位からは、「堀は断面形状から推定して古代に遡る時期の可能性はある」、更には「工場本館の下にも堀が残っている可能性があると考えられること」、「当該地が花巻城の時期と、その前の時期と、あるいは安倍氏の時代と何段階かが残っているかもしれないこと」などのご指摘もいただいている。今回の試掘調査によって、当該地には時代や性格などについて様々な可能性を持つ埋蔵文化財が、なお包蔵されていることを明らかにすることができた。

(以上、文責 菊池)

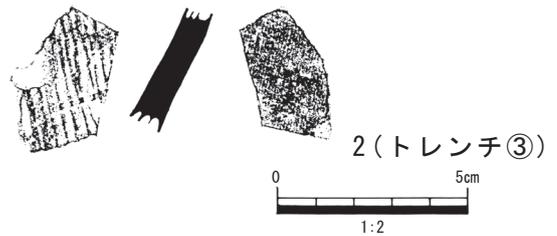
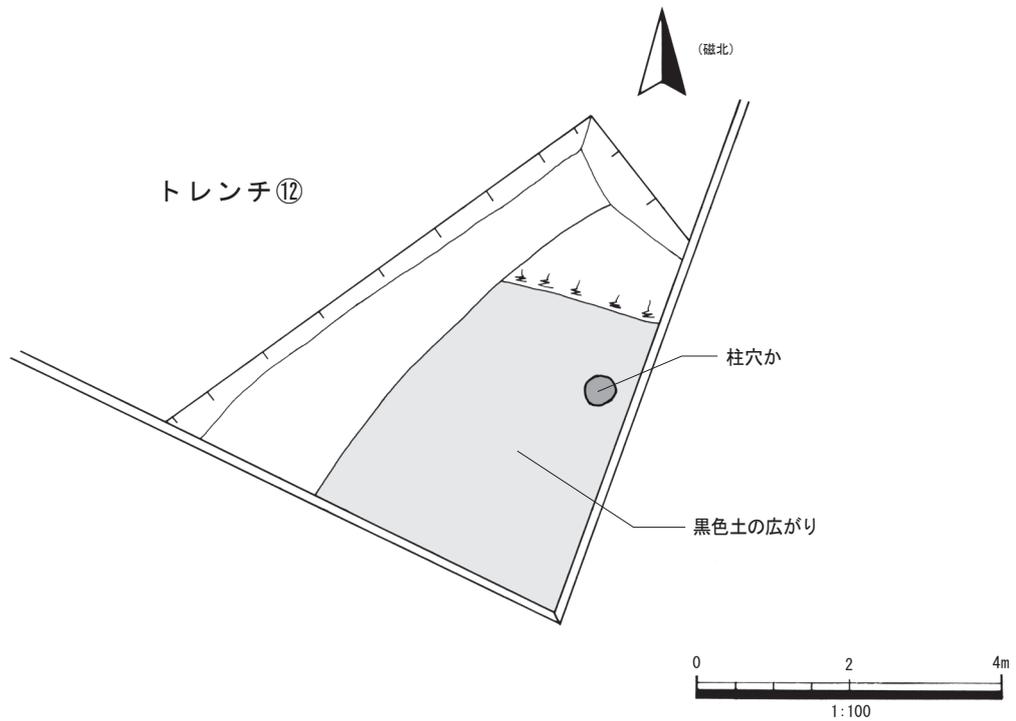
※北マークは磁北を示す。



第 15 図 トレンチ詳細図 (1)



第16図 トレンチ詳細図(2)



■磁器

掲載番号 図 番号	登録番号	遺構名	出土地点	出土層位	種類	器種	部位	時期	産地	文様等	技法	釉ほか	計測値			備考
													口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	
17 1	504	遺構外	トレンチ①	IV層付近	磁器	碗	口縁	1690~1780年	肥前	—	—	染付	—	—	(10)	

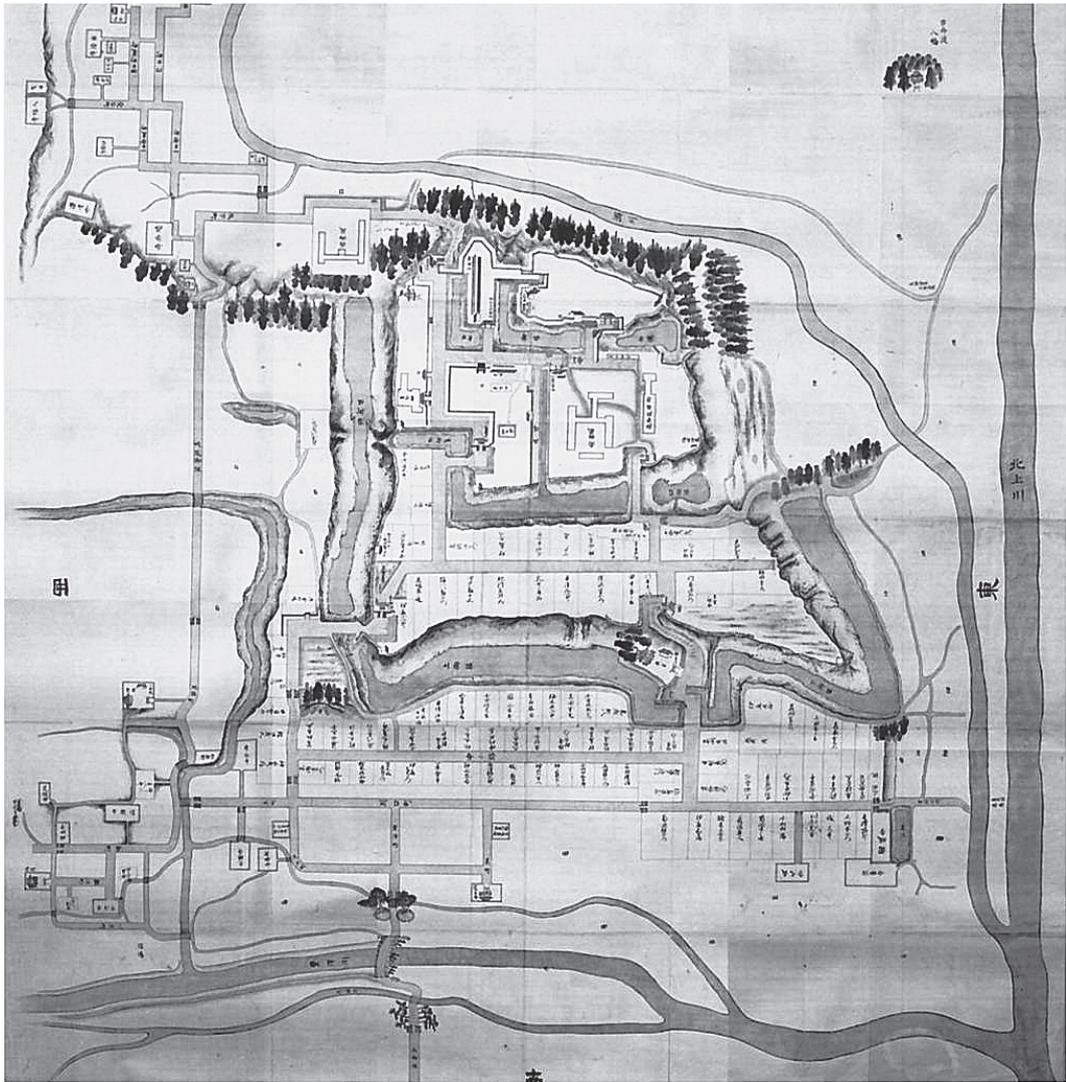
■土器

掲載番号 図 番号	登録番号	遺構名	出土地点	出土層位	種類	器種	部位	時期	器面調整等			計測値			備考
									外面	内面	底部裏	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	
17 2	503	竪穴状遺構	トレンチ③	埋土	須恵器	甕	体部	平安時代	タタキ目	—	—	—	—	(34)	胎土、やや赤味ある。

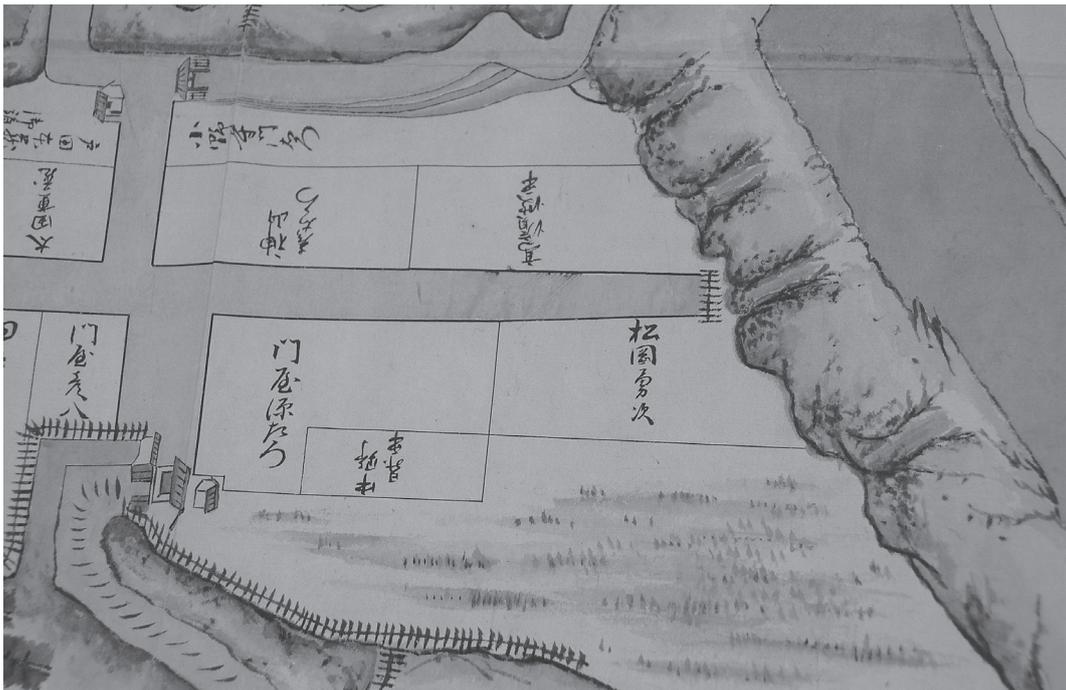
表6 出土遺物観察表

※ () は残存値

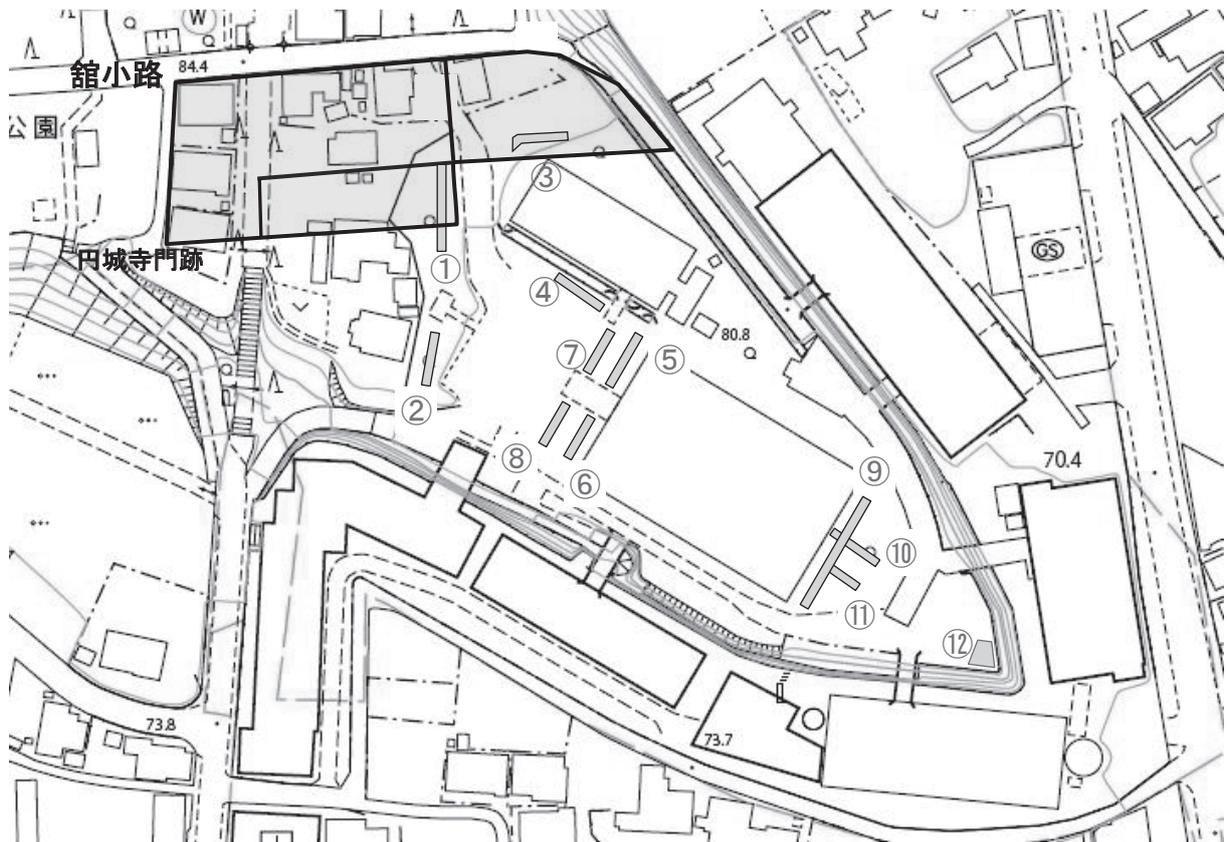
第17図 トレンチ詳細図(3)及び出土遺物



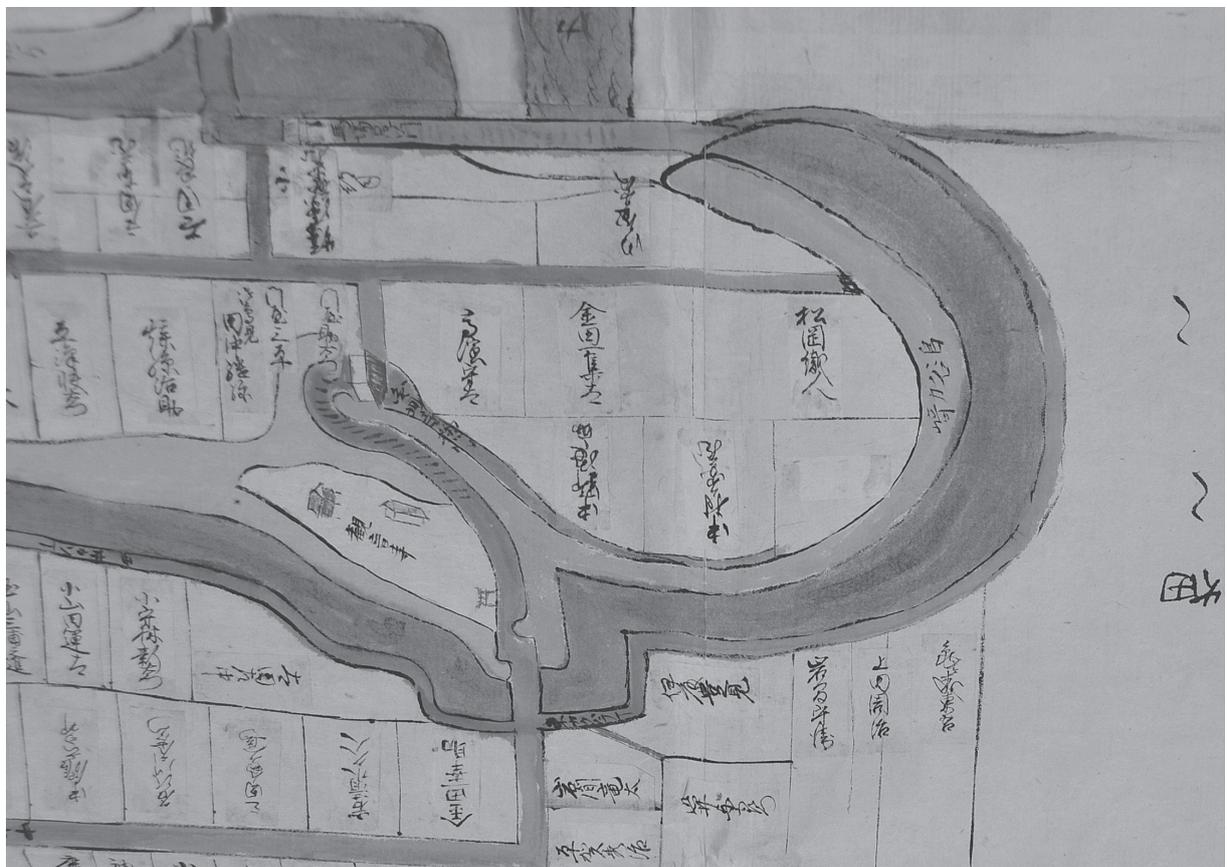
第18図 『花巻城之図』(岩手県立図書館所蔵)



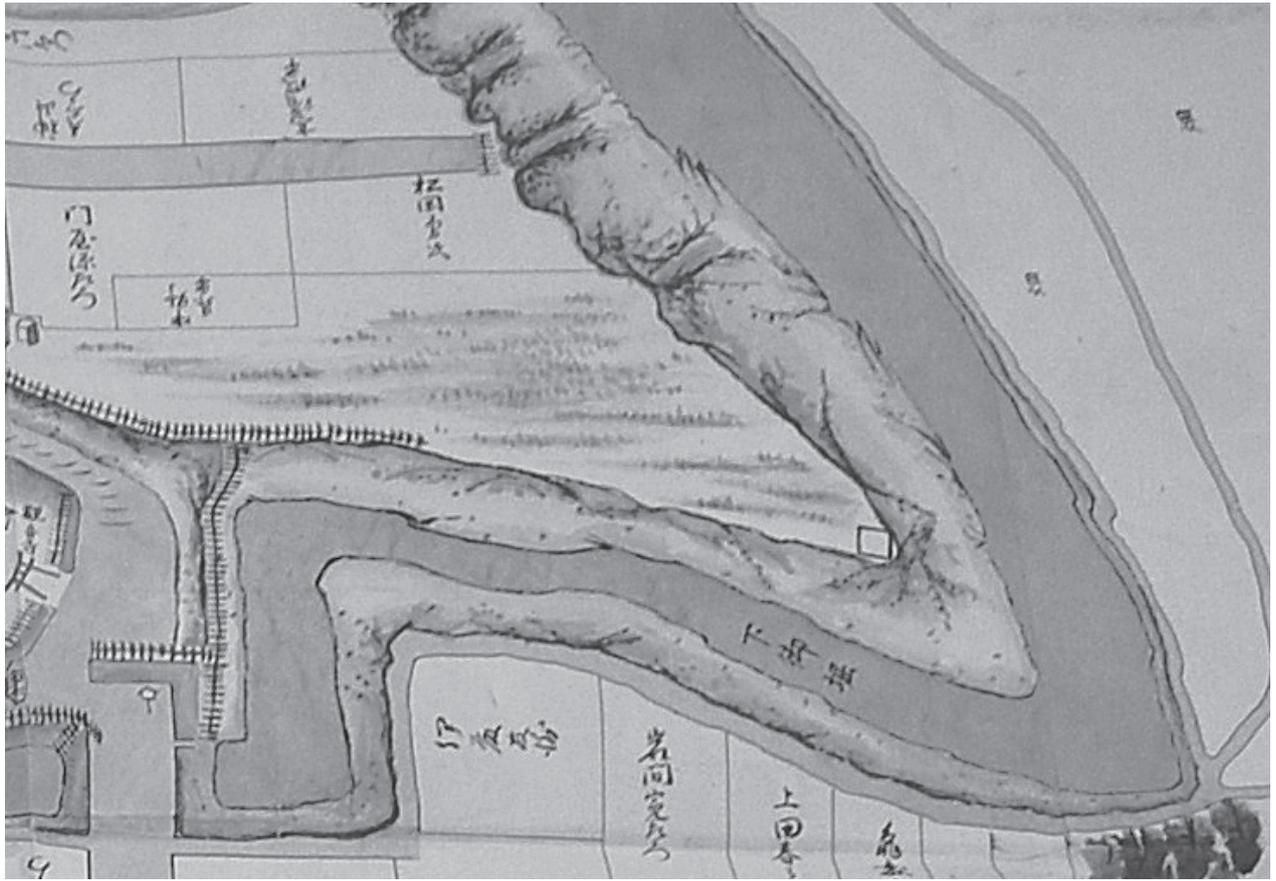
第19図 『花巻城之図』三之丸館小館・部分拡大写真



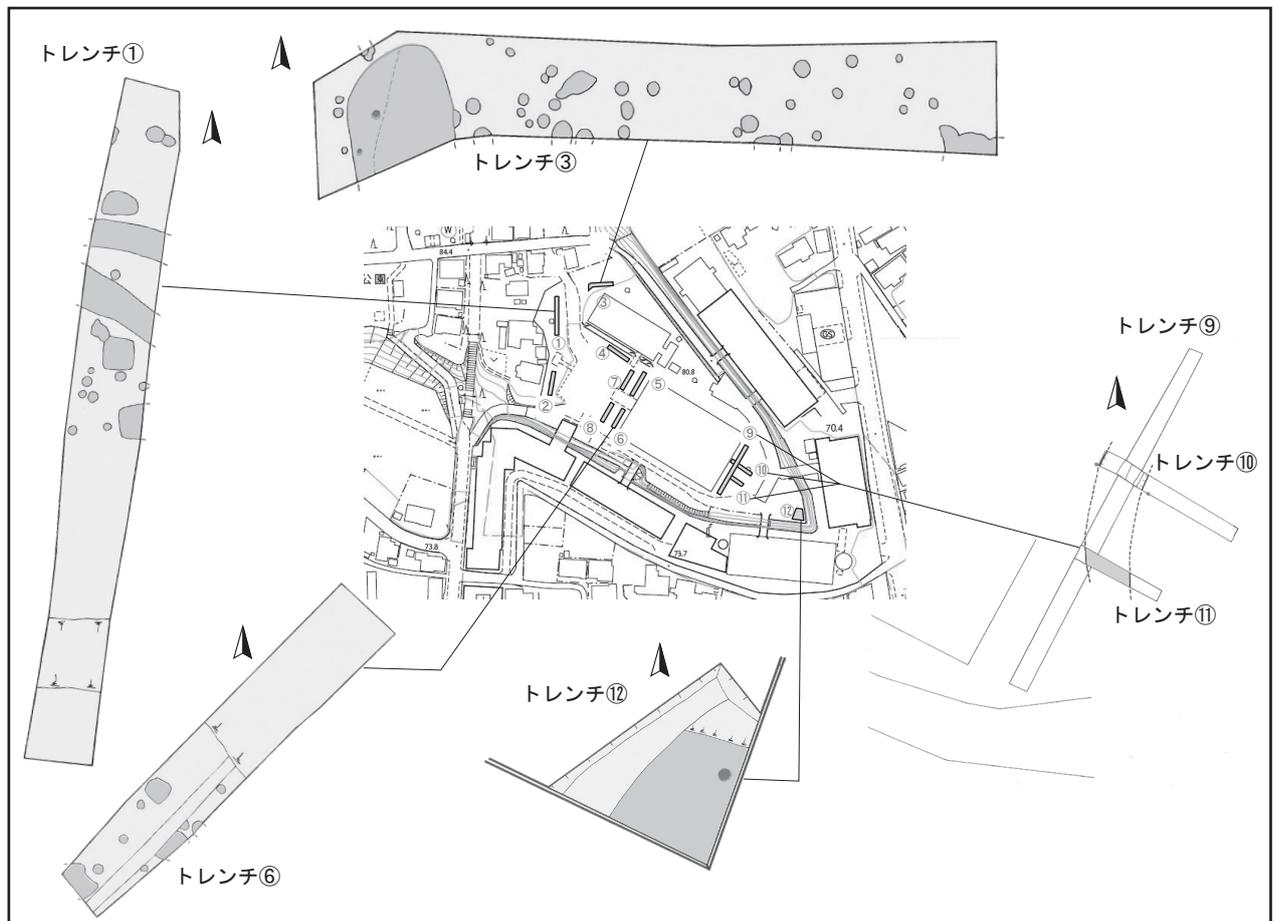
第20図 『花巻城之図』に見る武家屋敷範囲と試掘トレンチ位置の関係



第21図 『花巻城下図』(もりおか歴史文化館所蔵)部分拡大



第 22 図 『花巻城之図』 にみえる突端部の状況



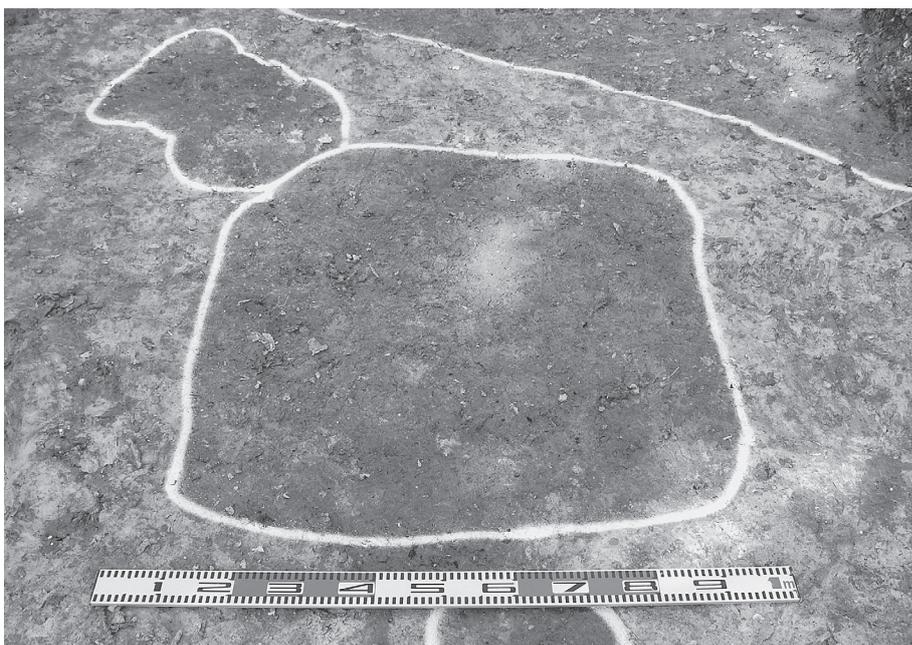
第 23 図 主要トレンチ配置図



調査区調査前
近景（南から）

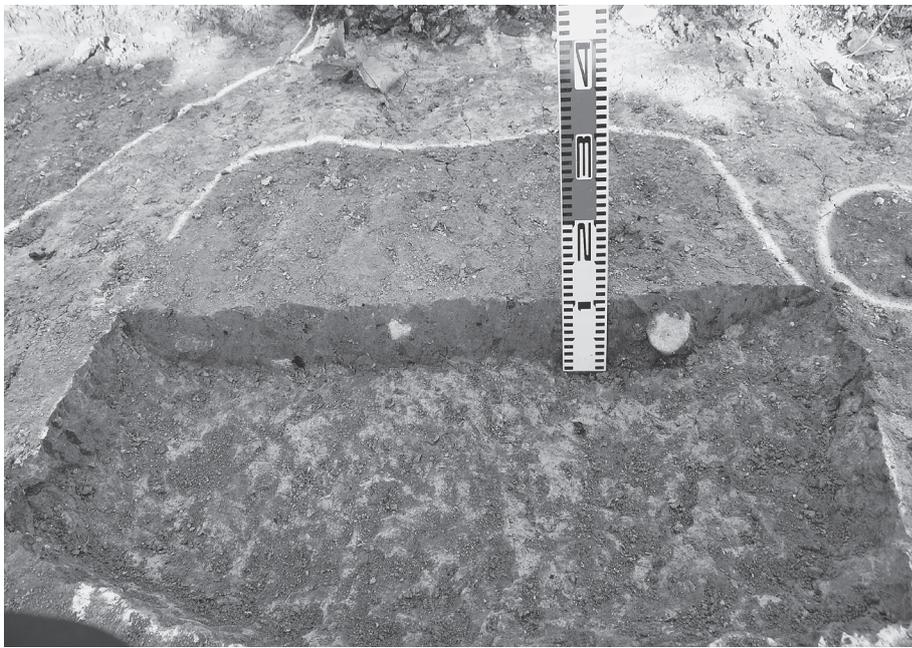


トレンチ①
検出遺構（南から）



トレンチ①
方形土坑 検出（南から）

写真図版 11 花巻城跡三之丸（新興製作所跡地）試掘状況（1）



トレンチ①
方形土坑 断面（西から）



トレンチ③
検出遺構（西から）



トレンチ③
竪穴状遺構 検出（南から）



トレンチ⑥
検出遺構（南から）



トレンチ⑦
溝跡 検出（南西から）



トレンチ⑨・⑩ 交差部分
堀跡 検出（北東から）



トレンチ⑨・⑩ 交差部分
堀跡 断面（北から）



トレンチ⑫
黒色土層 検出（西から）



トレンチ⑫
柱穴状土坑 検出（西から）

報告書抄録

ふりがな	はなまきしないいせきはくつちょうさほうこくしょ
書名	花巻市内遺跡発掘調査報告書
副書名	馬頭遺跡・花巻城跡
シリーズ名	花巻市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第24集
編著者名	橋本征也・菊池賢
遺物実測図	藤原昌子
遺物写真撮影	高橋純・吉田宗平
遺物写真編集	高橋純・吉田宗平
編集機関	花巻市教育委員会 文化財課
所在地	〒028-3163 岩手県花巻市石鳥谷町八幡4-161 電話 0198-45-1311
発行年月日	平成30年(2018)3月26日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
馬頭遺跡	花巻市 石鳥谷町好地 3-155-21	032051	LE86-2321	39度 29分 47秒	141度 8分 45秒	2016年 5月24日 ～6月14日	273㎡	個人住宅建設
花巻城跡 (三之丸)	花巻市 城内 49-5	032051	ME26-1079	39度 23分 21秒	141度 7分 15秒	2016年 5月9日 ～5月18日	8㎡	個人住宅建設
花巻城跡 (下堀)	花巻市 城内 4	032051	ME26-1079	39度 23分 23秒	141度 7分 23秒	2016年 5月16日	30㎡	大規模開発
花巻城跡 (三之丸)	花巻市 城内 32-10	032051	ME26-1079	39度 23分 17秒	141度 7分 24秒	2016年 9月13日 ～9月16日	330㎡	大規模開発
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
馬頭遺跡	散布地	縄文・古代	土坑、竪穴状遺構	縄文土器、石器、土師器、須恵器				
花巻城跡 (個人住宅分三之丸)	城館跡	中・近世	柱穴	陶磁器				
花巻城跡 (大規模開発分①下堀)	城館跡	中・近世	堀跡	磁器				
花巻城跡 (大規模開発分②三之丸)	城館跡	中・近世	土坑、竪穴状遺構 柱穴、溝跡、堀跡	須恵器、磁器				

要約

馬頭遺跡	緩い斜面地形部分で時期不明の土坑群を検出した。縄文期の陥し穴状遺構とは断面形状がやや異なるものであった。
花巻城跡 (個人住宅分三之丸)	近世・花巻城期の掘立柱建物跡に伴う柱穴群を検出した。遺物は、主に近世の陶磁器が出土した。江戸後半の戸田本蔵屋敷跡にあたり、広い屋敷地割内での建物及び庭等の配置推定の一助となった。
花巻城跡 (大規模開発分①下堀)	花巻城東辺部の防御施設である下堀について、深さ・上幅の規模が判明した。
花巻城跡 (大規模開発分②三之丸)	花巻城三之丸内に所在した旧新興製作所跡地において試掘調査を実施し、全体的に遺構が検出された。遺構には、武家屋敷に関係するとみられる柱穴群のほか、時期不明の堀や竪穴状遺構がある。

花巻市埋蔵文化財発掘調査報告書 第24集

平成28年度調査

花巻市内遺跡発掘調査報告書

ばとう
馬頭遺跡・花巻城跡

平成30年3月26日

発行 花巻市教育委員会 教育長 佐藤 勝
〒028-3163 岩手県花巻市石鳥谷町八幡4-161
TEL (0198) 45-1311
FAX (0198) 45-1322
印刷 川嶋印刷株式会社
〒021-0822 岩手県一関市上大概街3-11
TEL (0191) 46-4161